は之を總結して、第一偈に於て「昔より未だ聞見せざる所なり」の句を措いて昔を空くし。第二偈に於て「超出して正覺を成ぜり」の句を措いて、無上正覺を頌し。第三の偈に於て「苦惱の衆生を度し」の句を措いて、度一切世間苦惱の阿彌陀佛に還歸して居るのである。

念佛門の第一人者。

梵天の偈讃に於て注意すべき節々といふは、略右の如きものである、此所に余事ながらお話したく思ふは、彼の念佛門の第一人者善導のことである、善導の信條如何は別問題として、一心專念自信敎人信の態度に付ては、全く敬服するを禁じ得ない高僧の一人であるが、彼の善導は天台示寂後間もなく生れられた人で、天台の法華に拮抗して立つたの容もあるが、兎も角法華經に向ては、大に傾注せられた所があつたように窺はれる。彼れの正依の經が觀無量壽經にあつたは、申すまでもなきことであるが、彼の信條の組立の裏面には、全く法華經を參考とせられたの蹟あるは、疑なきものと思ふのである。蓋し善導は、法華經が約りは彌陀法であるとまでは、龐氣の推測があつて、未だ法華經に潛む佛の正意を摘發せらるゝ所にまで進まなかつたのであらう。

願以此功德平等施一切

善導が法華經に傾注し、毎に法華經を繙かれたといふ證據は、この上方の梵天の第二偈である、この第二偈は夫と名は出してはないけれども、全く彌陀、引いては釋迦の化益に付ての、滿腔の大偈であるのであるから、善導も毎々讀誦されて、たまらなく有難く感じて居られたのであらう、然るに其偈讃の結頌に至つて

願くば此の功德を以て　普く一切に及ぼし　我等と衆生と　皆共に佛道を成ぜん

の四句がある。所で此の四句が、又た常に善導の利他心を挑唆して居たものと見へて、彼の觀經玄義分の首頭、歸三寶の偈に此四句が見れて、其結頌に

願くば此功德を以て　平等に一切に施こし　同じく菩提心を發して　安樂國に往生せん

となつて出て居る。而して同じく玄義分で、歸三寶の偈に次いで、序題を標すといへる下に至つて、甘露を灑いで群萌を潤しの文字あるは、同じく梵天の偈の群萌類を哀愍して能く甘露の門を開くの二句を取りたるものであり。而して西化を隱して驚いて火宅の門に入りとあるは、法華經の譬喩品から出て居るはいふまでもなきことである。尙此等に付てお話すれば際限のないことゝなるが、若し幸に余命の尙容すあらば、他日觀無量壽經及び善導の信條等に付て、所見を開陳したいと

思ふのであるから、委細は他日に讓るとして、偶々今梵天の偈のお話をするので、平素所思の一端を記して御參考に供したのである、此等の事に付何か高敎を給ふの事あらば望外の幸である。

梵天の偈が濟むと。

化城喩品では、此の梵天の偈が濟むと、大通智勝佛の四諦十二因緣の說法となるのである、四諦十二因緣說法のことからは、前に委曲お話をした次第であるから、其所へ接續するものと御承知ありたいのである。

四　出世本懷　第二十（結論）

茲に結論に到著した。

扨前卷より述來つた出世本懷談も、漸にして茲に結論に到著した。更めていふまでもなく、古來一の諍議となり來つた、無量壽法華兩經の出世本懷なるものは、此の兩經が異つた法門である限りに於て、初めて意義ある諍議であり、且つ必要なる研究問題となるであらうが、私の所見の如く、此の兩經が孰も同一彌陀法を說かれたものと見るに於ては、孰が出世本懷であるかといふ諍議は、一向に意義を爲さぬことゝなり了つた譯である。

此所に一の問題がある。

併ながら此所に一の問題がある、妙法華經の名の下に說れる彌陀法は、多の諸佛が無量無邊の他方國土に出世せられて、何所に於ても之を說を以て其の元意とせられるのであるが、この大無量壽經の下に說れる彌陀法卽ち眞實之利は、二千五百年前、此の娑婆世界に出世せられた釋迦如來が、特に現代の群生を救拯せんが爲めに說かれたので、或は絕後といふべきではなからうが、全く空前の出來事である、其所に法華經と無量壽經とは、同じ彌陀法ながら大に趣きの異つた處がある。此事は自然經文の上にも顯はれて居るので、法華經では諸佛世尊は、唯一大事因緣を以ての故に世に出現すと、廣く諸佛に掛けてあるに對しし、大無量壽經では如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀す（中略）無量億劫にも値ひ難く見難し云云と、狹く如來と單數に呼ばれてある。經文の上に顯はれて居る文字の上から見てもそうであるが、惟り經文を見てのみいうではない、前に委曲お話した三紀變遷の上から考察するも、斯くあるべき筈の順序のものと思はれるのである。此所に結論に際して、上來說き來つた三紀關係の總勘定として、表を製してお目に懸けよう。

三紀明細表

推定世紀	法華經に依る佛名	應現說法者	經典名題	聽衆解疑
第一紀 前後混一	日月燈明佛	自說	無上正眞道意	六十小劫座を起ち給はず、時の會の聽者も亦た一處に坐して六十小劫身心動せず、佛の所說を聽くこと食頃の如しと謂へり。是時に衆中に一人の若は身若は心に、而も懈倦を生ずるもの有ること無かりき。
第二紀 前半	最後 日月燈明佛	自說	無上正眞道意に由る無上正覺之心	教菩薩法妙法華經
第二紀 後半	大通智勝佛	自說	無上正覺	同妙法華經

是經を說き給ひし時、十六の菩薩沙彌皆な悉く信受す、聲聞衆の中にも亦信解するあり、其余の衆生の千萬億種なるは皆な疑惑を生じき。

第三紀 前半	第三紀 後半			
大通智勝佛	阿彌陀佛			
十六菩薩	釋迦			
無上正覺に由る無上殊勝之願	無上殊勝根本意趣	無上殊勝分別顯示（無上殊勝廣義展開）眞實之利		
教菩薩法妙法華經	同妙法華經	欲拯群萌大無量壽經		

佛、諸の比丘に告げ給はく、是の十六菩薩は常に樂つて是の妙法蓮華經を說く。一一の菩薩の所化の六百萬億那由他恒河沙等の衆生、世世に生るゝところ菩薩と具にして、其に從つて法を聞て悉く皆な信解せり。

此語を說き給ふ時、會中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の五千人等有て、卽ち座より起ち、佛を禮して退きぬ。（中略）舍利弗、是の如き增上慢の人は退くも亦佳し、汝今善く聽け、當に汝が爲めに說くべし。

佛は法王たり尊きこと衆聖に超ゆ、昔く一切天人の師たり、心の所願に從ひ皆な得道せしむ。今、佛に値ひ、復た無量壽佛の聲を聞くことを得て、歡喜せざるなし心開明を得たり。

一大事因緣と眞實之利。

右表に於て、大通智勝佛の無上殊勝の願の所までは、別に説明を須つまでもなく、上來の講演に於て合點せらるゝことであらう。夫でここでは、第三紀後半の彌陀成佛釋迦説法の下に付て、法華經の諸佛なる複數の下の一大事因緣、大無量壽經の如來なる單數の下の眞實之利、此の兩者の相違點をお話しよう。これと同時に前卷(講錄九十七頁)經文文義の解釋に於て眞實之利の文字に付て略説して、未了の儘でおいたを、自然ここで補足する譯となり、延ひては前卷の首頭に掲げた、經文の一節の文義の講演も、この下で結了する譯となるのであるから、前卷より續いて見らるゝ方は特に其含みを以てせられたい。

一大事因緣とは。

一大事因緣とは何か、手短にいへば佛法といふに過ぎないであらう。併し法華一經の宗趣から歸納して、試に最も適切なりと思ふの解釋を下すならば、一大事とは阿彌陀佛の大果報を言ふたものである、阿彌陀佛の大果報は宇宙法界に於ける一大事である、其大佛果を顯現されたことの因緣を、衆生に開示せんが爲めに出世せられたを、諸佛世尊は唯一大事因緣を以ての故に世に出現し給ふと記されたのである。夫と同時に、又我々が大佛果の一大事を贏得するの因緣を説示されるの

一切法は悉く因緣の所成。

義も副うのであると、見るべきであらう。

茲に一大事因緣と言はれた言裏に於て、彌陀法として法華を見る限りは、彌陀法の根本義趣を説かれたものと見ねばならぬ、例へば無上殊勝の願にしても、其無上殊勝の願の根本義趣を説かれたものと見ねばならぬ。如何となれば因緣なる言其物が、既に一切法の根本を意味して居る、佛法では一切法は悉く因緣の所成となすのである、釋迦が成道前後尤も思を凝されたは因緣の法則であつた、迷も因緣の法則を出でざると同時に、悟も因緣の法則を逸することは出來ない、百事百物其根本を糺明すれば、結局因緣の二字に出でないと理解されたのであつた。されば四諦といふも十二因緣といふも、悉く因緣の寄木細工に外ならぬのである、それで無上殊勝の願といふも、一の因緣法に外ならぬのである、一大事因緣である。如是因如是緣の下に、如是果如是報あり、其因緣大果報の下に、如是力如是作の無上殊勝の願も顯はるゝのである、諸佛の知見はここにある。この知見波羅密を衆生に開示し、衆生に悟入せしめん爲めに出世せられたのである。

皆な一佛乘の爲めなり。

而して是は釋迦一佛のみ然るにあらずして「過去の諸佛衆生の爲めに諸法を演

説し給ふ、是の法も皆な一佛乘の爲めなり、未來の諸佛當に世に出で給ふべき、亦衆生の爲めに諸法を演説し給はん、是の法も皆な一佛乘の爲めなり、是の諸の衆生の佛に從ふて法を聞かん、究竟して皆な一切種智を得べし」(方便品)とあつて、諸佛は無量無數の方便を以て種々の法門を説くと雖も、約りは彌陀一佛乘の一大事因緣を説かるゝを以て、出世の本懷となすのである。ここを諸佛なる複數を冠せて、諸佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に世に出現し給ふと、説かれたのである。

（次に大無量壽經であるが。）

法華經の一大事因緣は以上の如しとして、次に大無量壽經であるが、釋迦が佛眼を放て世間の模樣を見渡されるに、如何にも濁惡氣分が濃厚であつて、現に無漏不思議の甚深微妙法を開説せられんとするに際し、天から聞くことさへも快しとせず、袖を振るつて此の法華の會座を退轉するの、五千の罪根深重なる四衆がある如き有樣である到庭此分では、無上殊勝の願の根本旨趣を記帳面に演暢する計りでは、此の群萠蒼生を救ひ盡すことが出來ない、尙時代不適當の譏を免れないであらうと、此見込からして前の表にも示したるが如く、無上殊勝の願の根本旨趣に基きて、更に眞實之利を以てする、大無量壽經を説かれることゝなつたのである。

（眞實之利なる文字に付て。）

ここで前卷と重複するに拘はらず、眞實之利なる文字に付て、解釋を試みつゝお話を進めるであらう。眞實とは眞如實相をいふのである、眞如と呼ぶも、實相と稱するも、ここに眞實といふも、其義相に於ては立場立場があるので多少の相違がないでもないが、約り同體同相のものをいふたに過ぎない。利の文字は利は宜なりとあつて、宜しきに處するは利である。それで惠むに眞實之利を以てするとあるは、眞如實相に契會するの利（よろしき）ところ、眞如實相を體得するに利（よろしき）ところを決正し、説示せらるゝを言ふたのである。周易には利は義の和なりとある、義は事物を裁制して各をして宜からしむるを謂ひ、和は能く物に隨順し、堅ならず柔ならざるを謂ふの文字としてある。所で佛法の根本義から演繹すれば、無漏實相に隨順して其大道を行じ習はんとするには、一切法空の下に布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密を修習しなくてはならない、之を修習しつゝ、無量千萬億の諸佛に供養する所に於て、遂に無始己來の無明を斷盡して、大智慧光明常樂我淨の佛果を贏得するの理由が具はるのである。然るに右樣のことは、勇猛精進の菩薩にして、而かも其上級に在るものに對してのみ望むべきことであつて、未熟新發意の菩薩、又は徒に人世

の老死盛衰を果敢なみ、漸にして佛道を求むる如き輩に對して、理想的に無漏實相の大道に隨順せんことを强ゆるは、邻て角を矯めんとして牛を殺すの虞れがある、況や今は落花狼藉法華の會座から五千の退去者を出すが如き時代である。大通智勝佛の名の下に於ての無上正覺より進んで、阿彌陀佛の名の下に於けるの無上殊勝の願であるが、其の無上殊勝の願すら、或は其用を全からしめ兼ねるので、今の惠むに眞實之利を以てせらるの止むなきに至つたのである。

扨て其順序として、如何なる方途に出で、如何に眞如實相の會得の上に利を計られ、惠まるゝの手段を講ぜられたかといふに「衆生の種種の地に住せる、唯如來のみあつて、如實に之を見て明了無礙なり」(藥艸喩品)とあつて、夫は吾人が容易に佛の深慮を揣摩すべきではないが、竊に惟ふに、無上殊勝の願の根本旨趣に副ひ、且つ之を延長し、無量壽佛なる名字の意義を他まで廣義に解釋して、無量壽佛が無漏實相の現れであると同時に、天地の大用たるものも亦悉く無漏實相の派生であると大觀されたのであらう。而して茲に世法の仁義忠孝は、天地の大用に隨順したる所の大道とすべきと共に、其至誠心は亦た悉く實相ならざるはないとせられたのであ

是れ併しながら。

らう。是れ併ながら、現代の如き弱肉强食、生存競爭の激しき時代に於いて、無漏實相の根本法に進むの順路であると決正されたのである。ここを大無量壽經には「今我れ此世に於て作佛し、經法を演說し、道教を宣布し、諸の疑網を斷じ、愛慾の本を拔き、衆惡の源を杜づ」と說かれ、更に進んで「三界に遊步して拘礙する所なく、典攬智慧衆道の要、綱維を執持して、昭然分明に五趣を開示し、未度の者を度し、生死泥洹の道を決正す」と斷ぜられてある。而して五、趣、開、示の下に於て、五善五惡を詳說せられ、專ら仁義忠孝を策勵して「善人は善を行じて、樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行じて苦より苦に入り、冥より冥に入る」と敎へられてある。

此所が謂ゆる、群萠を救はんと欲し惠むに直實之利を以てせられたるの實際決正である、卽ち眞如實相の現れなる、無量壽佛の大道に契會するの利を惠施せられたのである。斯く仁義忠孝を以て眞如實相に入るの門とせられたるは、義の和である、事物を裁制して宜からしむるの所以である、堅ならず柔ならず而かも天地の大道に隨順し、無漏の大道に隨順するの所以である。而して此の釋尊の佛眼觀察の下に成辨したる、眞實之利を說かれたるが、大無量壽經經文五十三頁十二行の「佛、

實際決正である。

彌勒菩薩諸天人等に告げ給はく」以下である、ここが釋迦如來の此の濁惡世に降誕せられた最大理由のある所、最大効果のある所である。そこで大無量壽經は、最初から無上殊勝の四十八願も、之に伴ふ經法も、悉く阿難を對手に說かれたのであつたが、此の欲、拯、群、萠の大無量壽經の主眼點、卽ち濁惡衆生の成佛の極致たる眞實之利の段に入つては、今まで阿難を對手に說かれたるを變じ、更に釋迦の嗣佛たる彌勒菩薩を呼出し、對告者とせられたのである。これが法華經に於て、佛寶を說かるゝに際しては、彌勒菩薩を對告者とせられたと同旨趣に歸するのである。

佛意眞義のこゝにあるは。

御參考までに申て置くが、此邊に於ける大無量壽經の見方が、古來の解釋と全然異なるのであるが、法華經と對照する上に於て、佛意の眞義のこゝにあるは、斷乎として動すべからざるものである。又必ずしも法華經と對照するを須ひない、單獨に大無量壽經のみを見るも、こゝに歸結する外はないのである、此等のことは大無量壽經全部の講演を終るの日に於て明瞭するであらう。此の惠むに眞實之利を以てするの旨趣は、觀無量壽經にも顯れて「父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修するは三世諸佛の淨業正因なり」と說かれてある。

法華經と大無量壽經の關係は。

夫で法華經と大無量壽經の關係は、結局斯うなるのである。元來なれば大無量壽經の最初より、四十八願にせよ、淨土の莊嚴にせよ、三輩段にせよ、乃至菩薩宣說段卽ち經文五三頁十一行の「若し廣く說かば百千萬劫にも究盡すること能はじ」に至るまで、卽ち阿難を對手に說かれた所の全分は、法華經中に入るべきものと見ねばならぬ。必ずや此に次ぐの眞實之利を說かるゝの後段がなかつたならば、別に大無量壽經なるものは說かれないで、法華經の說相は現在のものよりは少し異なる所あらんも、約り法華經のみで釋迦の說法は終了したのであつたであらう。然るに此の釋迦出世の本懷中に於て、時代救拯には最も喫緊要切なる、眞實之利を說かれねばならぬのであるから、釋迦は其豫定の下に、佛意の貫徹を圖るのを手段として、同一彌陀法を法華無量壽兩經に區ち、法華經の方は謂ゆる一大事因緣の下に、無上正覺及無上殊勝の根本義を說法され、大無量壽經の方は無上殊勝の願に基く、眞實之利を敎語されたのである。但眞實之利と雖も、其源泉は遠くは無上正覺近くは無上殊勝の願にあるのであるから、眞實之利の前段として、無上正覺別しては無上殊勝の願の內容を、極めて細やかに且つ卒直に、一面には十分時代をも顧慮され、

心を盡して說示され、後段の眞實之利＝大無量壽經としては、主眼目的の存する眞實之利と相待ち相照し、寸毫心得違ひを起さしめぬよう、企圖されたものと窺ふべきである。

法華經の中にも度々顯れて。

但し大無量壽經に於て眞實之利を說かれるの佛意は、法華經の中にも度々顯はれて居ることで、彼の藥艸喩品に

如來、時に是の衆生の諸根の利鈍精進懈怠を觀じて、其の堪る所に隨て、爲に法を說くこと種種無量にして皆な歡喜し快く善利を得せしむ。是の諸の衆生、是法を聞已つて、現世安穩にして後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦た法を聞こと

を得、既に法を聞き已て、諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。

と說かれたる如きは、卽ち眞實之利を說かれるの根本意志である。而して囑累品に至つて

未來世に於て、若し善男子善女人あつて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此の法華經を演說して、聞知することを得しむべし、其人をして佛慧を得せしめん

が爲めの故なり。若し衆生あつて信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示敎利喜すべし、汝等若し能く是の如くせば、則ちこれ已に諸佛の恩を報ずるなり。

と說かれたるは、明かに大無量壽經、別しては眞實之利の段を指されたものである。囑累品は法華經を囑累せらるゝのであるから、法華經の名前を出し、總て阿彌陀佛の名を匿して說れつゝある、法華經の中心要品の內であるから、大無量壽經の名は出さないで、唯如來の餘の深法中とのみしてあるが、之が大無量壽經の眞實之利段を指されてあるは、前後文字に顯れて居る義相から見て、毛頭疑の余地はない、其理由は今は省略して置く。

兩經の說時である。

終に臨んで一問題の決すべきがある、ソハ他に非ず法華無量壽兩經の說時である、前卷で豫告しておいた如く、斯く法華經を研究し來つて見れば、大無量壽經なるものは法華經を說かれたと同時であつて、寧ろ其後に說かれたものと見るに付て異論のないことであらう。古來の學匠が相牽ひて、大無量壽經の說時は、法華經よりはずつと前時であると相唱へた如き、此兩經の意味を全然會得することの出來

なかつたに由來した過謬である。前卷(一二三頁)に於て詳細お話した、大無量壽經の末尾に說かれた十四佛國のことであるが、この十四佛國のことから見ても、大無量壽經は法華經の後に說かれたものと見るが當前であらう。右は末尾の十四佛國の一節から見てのことであるが、ここには首頭の一節に現はれて居ることに付てお話しておこう。大無量壽經の首頭に

又大乘の衆菩薩と俱なりき、普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等、此の賢刼中の一切の菩薩、又賢護等の十六正士云云

と記されてある。この賢護等の十六正士といふが如何なる人のことであるか、古來の學匠がなかなかに骨を折つて、種種の說を爲して居る所であるが、此亦迂遠極つた話で、約りは法華無量壽兩經の關係が、分らなかつたに由つて起つたことであるが、大無量壽經は法華經に次いで直に說かれたものとして見れば、この十六正士は何の穿鑿も無用のことで、其名前までが皆な分つて居る譯である。夫は法華經の首(はじめ)に、聽法の菩薩の名前が記されてあるを見るに

其名を文殊師利菩薩、觀世音菩薩、得大勢菩薩、常精進菩薩、不休息菩薩、寶掌菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、寶月菩薩、月光菩薩、滿月菩薩、大力菩薩、無量力菩薩、越三界菩薩、跋陀婆羅菩薩、彌勒菩薩、寶積菩薩、導師菩薩と曰ふ。

とある。この菩薩方が、其儘續いて大無量壽經の會座に列せられたと見るべきである、尤も此中に、普賢菩薩の名前は見へないが、これは法華經の會座の將に終らんとする時に、駈著けられたのであるから、法華經の列名の中には見えないで、大無量經の方には記されたとゝなつたのである。そこで法華經の列名の菩薩の中から、大無量壽經に特に揭げてある、妙德(文殊)と慈氏(彌勒)の二菩薩を除き、殘の菩薩を數へ上げると十六の菩薩となる、そして賢護菩薩といふのが、十四番目の跋陀婆羅菩薩のことである、して見ると賢護等の十六正士ありと記されてあるは、法華經の列名の中から、文殊と彌勒の二菩薩を除いた、殘の十六菩薩といふことが明かに分るであらう。而して之と同時に、大無量壽經は法華經と同時の說法で、其後座に說かれたといふことが瞭かに推測されるのであらう。

最終の結文を見ても。

尙又序にお話して置くが、經の最終の結文を見ても此事は分るのである。法華經は最初に於て、委しくは序品に記されたる如き、無量義處三昧等の大舞臺を以て

せられたるに拘はらず、最終結末の文の振はざることは夥しい。

佛是を說き給ひし時、普賢等の諸の菩薩、舍利弗等の諸の聲聞及び諸の天龍人非人等の一切の大會、皆な大に歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき。

と唯これ丈のことが記されてゐる。些事のようではあるが、釋迦出世本懷の大說法たる法華經としては、辻褄の合はないことで一の缺點とせざるを得ない。所が能く之を考へて見ると、法華經なるものは、大無量壽經を說かれた所で初めて完結を見るので、法華經の結文なるものは、言はば中休の記事である、夫として大無量壽經の結文を見ると、「爾の時世尊、此の經法を說き給ふに、無量の衆生皆な無上正覺の心を發し云云」といふより、六種震動大光普照等言語道斷の大模樣が記されてゐる、これが卽ち法華無量壽兩經の結末文と見るべきものである。

無上正覺の心を發し。

それで初めに、無量の衆生皆な無上正覺の心を發しと記されてゐるは、前に申た如く無上殊勝の願なるものは、無上正覺よりの自然の開展である、無上殊勝の根本は無上正覺にあるのである、そこで法華經は、無上正覺無上殊勝の根本法を說かれたのであるから、こゝに法華經を承けて無量の衆生皆な無上正覺の心を發しと記

されたのである。而して後に、「四十億の菩薩不退轉を得、弘誓の功德を以て自ら莊嚴す、將來の世に於て當に正覺を成ずべし」と記されてゐるが、法華無量壽兩經の結文であつて、弘誓の功德といふが、阿彌陀佛の本願弘誓の功德たるは論なきことである。この本願弘誓の大慈悲が展開して、更に眞實之利ともなる所以である。

首尾の記事を吟味せば。

右の如く法華無量壽兩經の首尾の記事を吟味せば、事實の上に於て、一層兩經の關係が明白となり、結文に顯れた記事の上にも此の缺點なきことゝなるのみならず、却て佛意を窺測するの好資料となり、說時の前後に於ても、更に疑の餘地なき所が知了せらるゝであらう。

文に於て義に於て。

以上の如きであつて、文に於て義に於て、何處から何處までも、兩經の抱合すべきものたるは疑の餘地はない。喩へば根幹の如きである、根あつての幹、幹あつての根である、大無量壽經は幹の如く、法華經は根の如く、根深ければ則ち幹大なり、源遠ければ則ち流れ長し、相依り相須つて其所に蔚然たる大宗敎が現出するのである。法華經にして大無量壽經を缺がば、囑累品に於ける如來の囑累は、所有せざるの寶を以て財產分配の遺言狀に記したるが如きものとなり、大無量壽經にして法華經

を缺がば、其根本法門を失し、剩へ阿彌陀佛は戸籍の審ならざる中間佛となり、無上殊勝の本願も、大に價値を減ずるの蹉跌を來す恐なしとも限らない。

天台の此の臨終の言は。

茲に於て想ひ起さるゝは、天台大師の臨終の言である、法華經を贊しては「法門の父母慧解由つて生じ、本迹曠大微妙測り難し」と言ひ、大無量壽經を贊しては「四十八願淨土を莊嚴し、華池あり寶樹あり、往き易くして人なきか、火車相現ずるも、能く改悔せば尙往生を得る」と言はれたということであるが、天台と私と法華經に對する見解は、似ても似つかず、根本的に相違して居るは、上來の所述で明かであるに拘らず、天台の此の臨終の言は、取て以て私の言として此卷の終りが飾りたいのである。無上正覺に立脚し、力無畏無礙に一大事因緣を說かれたる法華經は、如何にも法門の父母慧解由つて生じ、本迹曠大微妙測り難きものがあると同時に、無上殊勝の願に立脚して、和顏愛語に充たされ、眞實之利を說かれたる大無量壽經は、別に文字の工を弄するよりは、四十八願淨土を莊嚴し、華池あり寶樹あり、往き易くして人なきか火車相現ずるも能く改悔せば尙往生を得る」と天台の言を其儘措ひて、此講演結末の辭としたいのである。或は惟ふに、天台大師も法華無量壽兩經の關係、及び法

華經の解釋に付て、何かの機會に於て大に覺醒せられた所があつて、私の所見に近寄られたのではなかつたのであらうか、而して其意見を發表するに至らずして、不幸不起の病に罹られたのではなからうか、往年の獅子吼を回顧せられ、感慨無量彼の終言となつて現れたのではなからうか、私は天台の法華經觀には徹頭徹尾反對するが、天台の終言を眺めては、如何にも我が親しき師父でもあるかの想が起る。

本多日生、清水龍山二師の。

私は本年(壬戌)六十歲、恰も天台示寂と同年であるが、何れ遠からず黃泉に師に謁するの時があるであらうから、其時は緩々師の敎を請ひたいと思ふのである。

前卷の掛り口で、出世本懷談の副產物としては、法華無量壽兩經の綱格をも捕へ、進んでは大乘佛敎なるものゝ、中核にも觸れて見たいなどゝ申て置いたが、多少なりに綱格をも捕へ、中核にも觸れたと氣付かれたであらうか、何樣法華八軸二十八品を、一と思ひに浚渫せうとかゝつたので、夫から夫と氣があせつて、甚だ落ちつきのないことであつた。尙前卷に於て抄錄した本多日生、清水龍山二師の法華經講要に付ても、一往のお話を致すべき筈であるが、若し之を批評するとなれば、私の法華觀から眺めては、一向に末節に趨つた議論で、取止めのないものと斷じ去るの外

はない。併し立入つて見ると、兩師の論ぜらるゝ所は悉く私の議せんとする所であつて大に敬意を表したい、態と前卷に抄錄したは大無量壽經を奉ずる側の方方へ、良藥的參考として提供したいの氣分もあつたのである。そこで今は又取つて以て我が藥籠中のものともしたい、誠に是の如き筆致を以てして、初めて法華經觀に於ても、佛身觀＝彌陀觀に付ても、其正鵠を道破するに足るものがあると思ふのである。

佛身觀を論ぜらるゝに至りては。

本多師の法華經講義に於て「法華經は實に佛陀設化の歸趨にして、滅後發展の中心なり。法華經は實に佛教の本質眞髓なり、故に完全なる法華經觀は、卽ち完全なる佛教觀なり」とあるは、法華經觀として更に之に加ふべき文字あるを見出さない。但夫れ佛身觀を論ぜらるゝに至りて、一意彌陀を排し釋迦を揚げんと試みらるゝ所、法華經全品の奥に隱れたる、彌陀佛あるを知られざるより出づる自然の歸結といふべく、熱誠なる求道の士女は、斯る不透明の見解に迷ふことなく、更に進んで彼の大日又は彌陀を以て、諸佛の統一主となすが如きは、恰も日本臣民として、他國の君主を奉戴する亂臣賊子と一般、釋迦敎の根本義を破却する一大僻見として之を

叱正痛擊し、偏に久遠無始實在の大恩敎主釋尊を奉戴して、その大慈大悲を渴仰敬讃し、壽量顯本の大義名分を蹂躙すること莫れ」と論結せられたる邊、其の大刀筋の鮮さ、其の戰鬪振の健氣さ、後段に控へたる彌陀釋迦二尊も、親の心子知らずとして、相顧みて微笑を漏されたことであらう。如何にも本多師の言はるゝ如く、一佛敎の上に二佛三佛を認むること、決して信仰の統一を期するの所以にあらず、私として滿腔の共鳴を惜まざる所である。佛意亦ここにあればこそ、序品及び化城喩品に於て、三紀の變遷を審にされたのである、又た多寶塔の出現を待ちて、法華一經の止まる所を、藥王菩薩本事品の彌陀佛國往生に示されたのである。今や將に此卷の終りを告げんとすこれ以上本多師の論述に對して、批評がましく更めて法華經の上に訴へて、佛意如何を問ふを須ひないであらう。

本多師に望まんとする所は。

但、本多師に望まんとする所は、若し幸に愚見に於て多少取るべき所のありとせられたならば、宗祖日蓮の掟せられたる信條と、法華經文の上に顯たる佛意との調和である、延ひては無量壽經を正依とする、淨土一門との調和である。是の如き問題は、師の如き高德にして、初めて考慮せらるゝの義務あり、價値あるものと思ふの

網器を四方に張りて。

である、私は空言を弄して徒らに此卷の終りを飾るものではない、誠心誠意期する所ありて、深く師に囑望する所があるのである。

次に清水師の法華經要義に於ける彌陀法に對する痛擊に至りては、論旨の摯實なる「今彼の大經(無量壽經)の彌陀は、其因壽を論ずれば僅に是れ具足五劫の思惟なり。其果壽を論ずれば僅に是れ十劫始成正覺なり、其間不可思議兆載永劫の因修を談ずと雖ども、其劫數は五劫と十劫との中間劫數なれば、限量有劫の劫數なり、何を以てか法華經の無始久遠に例せんや。是の如き有始の色心因果を以て、而して衆生無始の色心因果を攝取し救護すると言はむは、理義の決して許さゞる所なり云云」の邊、網罟を四方に張りて、寸許の通路をも與へざるものといふべく、若し夫れ法華經のあるあつて、之が解決を爲すなくば、彌陀法なるものは、恰も浮萍の今日は向ふの岸に咲くが如き、憐れ浪人佛の宗門と做了つたであらう。これ實に私が法華無量壽兩經抱合の上にして、初めて理想的蔚然たる大宗教たることを得んとして、前來五月蠅も說述した所以である、前來に於ける私の所述を吟味せられたならば、清水師も必ず意を安んぜらるゝ所があるであらう。此亦法華經と引合はして、

兩經を双奉する日の來らん事を。

議論を上下するは今は其用なきことゝして、前に本多師に望みたる所を以て、同じく師に望まんとするのである。而して其最後の目的は或點までの佛教の統一である、佛教の革新である、法華無量壽兩經は、此の世界思潮の大渦卷を眺めて、爲す所をも知らざる程に迂遠なるものでもない、世間と懸離れたるものでもない、牟尼世間解、三世了達の師子吼である。これ必ず師の如き、質直精進の方にあつては、疾くにお心得のあることであらう、佛日をして更に東天に曜かさしめんとするは、或は師の如き方の双肩にかゝる一大任務ではないであらうか、夫には今の時を措いて、將た何れの日に之を求めんとせらるゝであらうか、渾身を傾倒して至囑する所である。冀くは諸君に於ても等閑に附せず、兩師の論議さるゝ所を審にせられたい、此の講義に對しては必要なる參考となるのである(前卷講義一三七頁以下抄錄)、

顧れば最初の期待に反し、深く佛意を讃揚するを得ずして、ここに本卷の筆を擱かざるべからざるは、遺憾限りなきものがある。尙講演中後に讓るといひて、其の折に臨んでは失念して通り過ごした如き無念が多多あるであらう、現に妙音菩薩品に對する多寶佛の讃言の如き、其理由は藥王菩薩本事品に於て述ると申置なが

ら、失念してしまつた、併し此事は大無量壽經の勝行段といへる所においてお話する心構になつて居る、其他吟味したならば種種失態があるであらうが、緩り眼を通した上で、第四卷以下に於て折を見計ふて訂補することとする。但何れの秋か佛の正意が世に顯れ、天台、日蓮、淨土、眞宗等各派の佛殿の經机に於て、法華無量壽兩經を雙奉する日の來らんことを祈りて止まざるものがある。

普賢菩薩の咒文。

法華無量壽の兩經に潛む佛意を搜るべく、如何にしても判斷の及ばざるに當つては、毎に普賢菩薩の咒文を默唱して、彼の示敎利喜を請ふた、但慨むらくは悉くは夫を會得することが出來なかつたことであるが、これは膚受淺學、私の地質の咎である。こゝに終に臨んで、咒文を錄して報息の一端に供したい、若し讀み來つてこゝに至られた篤志の方があらせられたならば、必ずこの咒文を敬誦されたい。

あたんたい　たんだはたい　たんだはてい　たんだくしやれい　たんだしゆだれい　しゆだれい　しゆだらはち　ぶつだはせんねい　さるばだらにあばたに　さるばばしやあばたに　しゆあばたに　そうぎやばびしやに　そうぎやねつきやだに　あそうぎ　そうぎやはぎやたい　ていれいあだそうぎやとりや　あらていはらてい　さるばそうぎやさまぢきやらんだい　さるばたるましゆばりせつてい　さるばさるだろだけうしやりやあとぎやたい　しんあびきりたいてい。

立正大師（日蓮）法話

夫法華經と申すは、八萬法藏の肝心、十二部經の骨髓也。三世の諸佛は此の經を師として正覺を成じ、十方の佛陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ。今現に經藏に入つてこれを見るに、後漢の永平より唐の末に至るまで渡れる所の一切經論に二本あり。所謂舊譯の經は五千四十八卷也、新譯の經は七千三百九十九卷也。彼の一切經は皆各々分に隨つて我第一也となのれり。然るに法華經と彼の經々とを引合せて之を見るに、勝劣天地也、高下雲泥也。彼の經々は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經々は燈炬星月の如く、法華經は大日輪の如し。

慈恩大師は深密經、唯識論を師として法華經をよむ。杜順、法藏等は華嚴經、十住毘婆娑論を師として法華經をよみ、嘉祥大師は般若經、中論を師として法華經をよむ。此等の人々は各法華經をよむと思へども未だ一句一偈もよめる人には非ず。詮を論ずれば傳教大師理りて云はく、法華經を讀ずと雖も還つて法華經の心を死すと云云。例せば外道は佛經をよめども外道と同じ、蝙蝠が晝を夜と見るが如し。又赤き面の者は白き鏡も赤しと思ひ、太刀に顔をうつせるもの、圓かなる面をほそながしと思ふに似たり。今日蓮は爾らず。已今當の經文を深く護り、一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勸む。麻の中の蓬、墨うてる木の如し自體は正直ならざれども自然に直くなるが如し。經のまゝに唱へればまがれる心なし。當に知るべし、佛の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたき題目なる歟。

妙法蓮華經法師品第十

1 爾の時に世尊、藥王菩薩に因せて八萬の大士に告げたまはく、藥王、汝是の大衆の中の無
2 量の諸天・龍王・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人と非人と及び比丘・比丘
3 尼・優婆塞・優婆夷の聲聞を求むる者・辟支佛を求むる者・佛道を求むる者を見るや。是の如
4 き等類咸く佛前に於て妙法華經の一偈一句を聞いて、乃至一念も隨喜せん者には我皆記を
5 與へ授く。當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。佛、藥王に告げたまはく、又如來の滅度の
6 後に、若し人あつて妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨
7 多羅三藐三菩提の記を與へ授く。若し復人あつて妙法華經の乃至一偈を受持・讀誦し解說・
8 書寫し、此の經卷に於て敬ひ視ること佛の如くにして、種種に華・香・瓔珞・抹香・塗香・燒
9 香・繒蓋・幢旛・衣服・伎樂を供養し、乃至合掌恭敬せん。藥王當に知るべし、是の諸人等は
10 已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て大願を成就して、衆生を愍むが故に此の人
11 間に生ずるなり。藥王、若し人あつて、何等の衆生か未來世に於て當に作佛することを得

べきと問はゞ、示すべし、是の諸人等は未來世に於て必ず作佛することを得んと、何を以て
ての故に、若し善男子・善女人・法華經の乃至一句に於ても受持・讀誦し解說・書寫し、種種
に經卷に華香・瓔珞・抹香・塗香・燒香・繒蓋・幢旛・衣服・伎樂を供養し、合掌恭敬せん。是の
人は一切世間の瞻奉すべき所なり。如來の供養を以て之を供養すべし。當に知るべし、此
の人は是れ大菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を成就して衆生を哀愍し願つて此の間に生れ、廣
く妙法華經を演べ分別するなり。何に況んや、盡くして能く受持し種種に供養せん者をや。
藥王、當に知るべし、是の人は自ら清淨の業報を捨てゝ、我が滅度の後に於て、衆生を愍
むが故に惡世に生れて廣く此の經を演ぶるなり。若し是の善男子・善女人、我が滅度の後能
く竊かに一人の爲にも法華經の乃至一句を說かん。當に知るべし、是の人は則ち如來の使
なり。如來の所遣として如來の事を行するなり。何に況んや大衆の中に於て廣く人の爲に
說かんをや。藥王、若し惡人あつて不善の心を以て一刼の中に於て、現に佛前に於て常に
佛を毀罵せん、其の罪尙ほ輕し、若し人一の惡言を以て、在家・出家の法華經を讀誦する者
を毀訾せん、其の罪甚だ重し。藥王、其れ法華經を讀誦すること有らん者は、當に知るべ
し、是の人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるゝことを爲ん。

其の所至の方には隨つて向ひ禮すべし。一心に合掌して恭敬・供養・尊重讚歎し・華・香・瓔
珞・抹香・塗香・燒香・繒蓋・幢旛・衣服・肴膳をもつてし、諸の伎樂を作し、人中の上供をもつ
て之を供養せよ。天の寶を持つて、以て之を散ずべし。天上の寶聚以て奉獻すべし。所以
は何ん、是の人歡喜して法を說かんに、須臾も之を聞かば卽ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟
することを得んが故なり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言
はく、

若し佛道に住して　自然智を成就せんと欲せば　常に當に勤めて　法華を受持せん者を供
養すべし　其れ疾く　一切種の智慧を得んと欲するとあらんは　當に此の經を受持し　竝
に持者を供養すべし　若し能く　妙法華經を受持することあらん者は　當に知るべし佛の
所使として　諸の衆生を愍念するなり　諸の能く　妙法華經を受持することあらん者は
清淨の土を捨てゝ衆を愍むが故に此に生ずるなり　當に知るべし是の如き人は　生ぜんと
欲する所に自在なれば　能く此の惡世に於て　廣く無上の法を說くなり　天の華香　及び
天寶の衣服　天上の妙寶聚を以て　說法者に供養すべし　吾が滅後の惡世に　能く是の經
を持たん者をば　當に合掌し禮敬して　世尊に供養するが如くすべし　上饌衆の甘美　及

び種種の衣服をもつて　是の佛子に供養して　須臾も聞くことを得んと冀ふべし　若し能
く後の世に於て　是の經を受持せん者は　我道はして人中にあらしめて　如來の事を行ぜ
しむるなり　若し一切の中に於て　常に不善の心を懷いて　色を作して佛を罵らんは　無
量の重罪を獲ん　其れ　是の法華經を讀誦し持つことあらん者に　須臾も惡言を加へんは
　其の罪復彼れに過ぎん　人あつて佛道を求めて　一切の中に於て　合掌し我が前にあつ
て　無數の偈を以て讃めん　是の讃佛に由るが故に無量の功德を得ん　持經者を歎美せん
は　其の福復彼れに過ぎん　八十億劫に於て　最妙の色聲　及與香味觸を以て　持經者に
供養せよ　是の如く供養し已つて　若し須臾も聞くことを得ば　卽ち自ら欣慶すべし　我
今大利を獲つと　藥王今汝に告ぐ　我が所說の諸經　而も此の經の中に於て　法華最も第
一なり
爾の時に佛、復藥王菩薩摩訶薩に告げたまはく、我が所說の經典無量千萬億にして、已に
說き今說き當に說かん。而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり。藥王此の經
は是れ諸佛の祕要の藏なり。分布して妄りに人に授與すべからず。諸佛世尊の守護したま
ふ所なり。昔より已來未だ曾て顯說せず。而も此の經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況

んや滅度の後をや。藥王、將に知るべし、如來の滅後に其れ能く書持し讀誦し供養し、佗
人の爲に說かん者は、如來則ち衣を以て之を覆ひたまふべし。又佗方の現在の諸佛に護念
せらるゝことを爲ん。是の人は大信力及び志願力・諸善根力あらん。當に知るべし、是の人
は如來と共に宿するなり。則ち如來の手をもつて其の頭を摩でたまふを得ん。藥王、在々
所々に若しは說き若しは讀み若しは誦し若しは書き若しは經卷所住の處には、皆七寶の塔
を起て極めて高廣嚴飾ならしむべし。復舍利を安ずることを須ひず。所以は如何ん、此の
中には已に如來の全身います。此の塔をば一切の華・香・瓔珞・繒蓋・幢旛・伎樂・歌頌を以
て、供養・恭敬・尊重・讃歎したてまつるべし。若し人あつて此の塔を見たてまつることを
得て禮拜し供養せん。當に知るべし。是等は皆阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ。藥王、多
く人あつて在家・出家菩薩の道を行ぜんに、若し此の法華經を見聞し讀誦し書持し供養する
ことを得ること能はずんば、當に知るべし、是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜざるなり。
若し是の經典を聞くこと得ることあらん者は、乃ち能善菩薩の道を行ずるなり。其れ衆生
の佛道を求むる者あつて、是の法華經を若しは見、若しは聞き、聞き已つて信解し受持せ
ば、當に知るべし、是の人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり。藥王、譬へば人

あつて渇乏して水を須ひんとして、彼の高原に於て穿鑿して之を求むるに、猶ほ乾ける土
を見ては水尚ほ遠しと知る。功を施すこと已まずして、轉た溼へる土を見、遂に漸く泥に
至りぬれば、其の心決定して水必ず近しと知らんが如く、菩薩も亦復是の如し。若し是の
法華經を未だ聞かず、未だ解せず、未だ修習すること能はずんば、當に知るべし、是の人
は阿耨多羅三藐三菩提を去ること尚ほ遠し。若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず
阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ。所以は如何ん、一切の菩薩の阿耨多羅
三藐三菩提は皆是の經に屬せり。此の經は方便の門を開いて眞實の相を示す。是の法華經
の藏は深固幽遠にして人の能く到るなし。今佛、菩薩を教化し成就して爲に開示す。藥王、
若し菩薩あつて是の法華經を聞いて驚疑し怖畏せん。當に知るべし、是れを新發意の菩薩
と爲づく。若し聲聞の人是の經を聞いて驚疑し怖畏せん。當に知るべし、是れを增上慢の
者となづく。藥王、若し善男子、善女人あつて、如來の滅後に四衆の爲に是の法華經を說
かんと欲せば、云何してか說くべき。是の善男子・善女人は、如來の室に入り如來の衣を著
如來の座に坐して、爾して乃し四衆の爲に廣く斯の經を說くべし。如來の室とは一切衆生
の中の大慈悲心是れなり。如來の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如來の座とは一切法空是

れなり。是の中に安住して、然して後に不懈怠の心を以て、諸の菩薩及び四衆の爲に、廣
く是の法華經を說くべし。藥王、我餘國に於て、化人を遣はして其れが爲に聽法の衆を集
め、亦化の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を遣はして其の說法を聽かしめん。是の諸の化人、
法を聞いて信受し隨順して逆はじ。若し說法者空閑の處に在らば、我時に廣く天・龍・鬼神・
乾闥婆・阿脩羅等を遣はして、其の說法を聽かしめん。我異國に在りと雖も、時時に說法者
をして我が身を見ることを得せしめん。若し此の經に於て句逗を忘失せば、我還つて爲に
說いて具足することを得せしめん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を
說いて言はく、

諸の懈怠を捨てんと欲せば　當に此の經を聽くべし　是の經は聞くことを得難し　信受す
る者亦難し　人の渇して水を須ひんとして　高原を穿鑿するに　猶ほ乾燥ける土を見ては
　水を去ること尚ほ遠しと知る　漸く溼へる土泥を見ては　決定して水に近づきぬと知ら
んが如し　藥王汝當に知るべし　是の如き諸人等　法華經を聞かずんば　佛智を去ること
甚だ遠し　若し是の深經の　聲聞の法を決了して　是れ諸經の王なるを聞き　聞き已つて
諦かに思惟せん　當に知るべし此の人等は　佛の智慧に近づきぬ　若し人此の經を說かば

如來の室に入り　如來の衣を著　而も如來の座に坐して　衆に處して畏るゝ所なく　廣く
爲に分別し說くべし　大慈悲を室とし　柔和忍辱を衣とし　諸法の空を座とす　此に處し
て爲に法を說け　若し此の經を說かん時人あつて惡口し罵り　刀杖瓦石を加ふとも　佛を
念ずるが故に忍ぶべし　我千萬億の土に　淨堅固の身を現じて　無量億劫に於て　衆生の
爲に法を說く　若し我滅度の後に　能く此の經を說かん者には　我化の四衆　比丘比丘尼
及び淸信士女を遣はして　法師を供養せしめ　諸の衆生を引導して　之を集めて法を聽
かしめん　若し人惡刀杖及び瓦石を加へんと欲せば　則ち變化の人を遣はして　之が爲に
衞護と作さん　若し說法の人　獨空閑の處に在つて　寂寞として人の聲なからんに　此の
經典を讀誦せば　我爾の時に爲に　淸淨光明の身を現せん　若し章句を忘失せば　爲に說
いて通利せしめん　若し人是の德を具して　或は四衆の爲に說き　空處にして經を讀誦せ
ば　皆我が身を見ることを得ん　若し人空閑にあらば　我天龍王　夜叉鬼神等を遣はして
爲に聽法の衆となさん　是の人法を樂說し　分別して壅礙なからん　諸佛護念したまふ
が故に　能く大衆をして喜ばしめん　若し法師に親近せば　速かに菩薩の道を得　是の師
に隨順して學せば　恒沙の佛を見たてまつることを得ん

妙法蓮華經見寶塔品第十一

爾の時に佛前に七寶の塔あり。高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬なり。地より湧出して空
中に住在す。種種の寶物をもつて之を莊校せり。五千の欄楯あつて龕室千萬なり。無數の
幢幡以て嚴飾となし、寶鈴萬億にして其の上に懸けたり。四面に皆多摩
羅跋栴檀の香を出して、世界に充徧せり。其の諸の旛蓋は金・銀・瑠璃・硨磲・碼瑙・眞珠・玫
瑰の七寶を以て合成し、高く四天王宮に至る。三十三天は天の曼陀羅華を雨して寶塔に供
養し、餘の諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の千萬億衆は、
一切の華・香・瓔珞・旛蓋・伎樂を以て寶塔に供養して、恭敬・尊重・讚歎したてまつる。爾の
時に寶塔の中より大音聲を出して、歎めて言はく、善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能く平等大
慧・敎菩薩法・佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲に說きたまふ。是の如し、是の如し。釋
迦牟尼世尊所說の如きは皆是れ眞實なり。爾の時に四衆、大寶塔の空中に住在せるを見、
又塔の中より出したまふ所の音聲を聞いて皆法喜を得、未曾有なりと怪み、座より而も起

つて恭敬合掌し、却つて一面に住す。爾の時に菩薩摩訶薩あり、大樂說と名く。一切世間
の天・人・阿脩羅等の心の所疑を知つて、佛に白して言さく、世尊、何の因緣を以てか此の
寶塔あつて地より湧出し、又其の中より是の音聲を發したまふ。爾の時に佛、大樂說菩薩
に告げたまはく、此の寶塔の中に如來の全身います。乃往過去に、東方の無量千萬億阿僧
祇の世界に、國を寶淨と名く。彼の中に佛います、號を多寶といふ。其の佛本菩薩の道を
行ぜし時、大誓願を作したまはく、若し我成佛して滅度の後、十方の國土に於て法華經を
說く處あらば、我が塔廟是の經を聽かんが爲の故に、其の前に涌現して、爲に證明と作つ
て、讚めて善哉といはん。彼の佛成道し已つて、滅度の時に臨んで天人大衆の中に於て、
諸の比丘に告げたまはく、我が滅度の後我が全身を供養せんと欲せん者は、一の大塔を起
つべし。其の佛神通願力を以て、十方世界の在々處々に、若し法華經を說くことあれば、
彼の寶塔皆其の前に涌出して、全身、塔の中に在して讚めて善哉善哉と言ふ。大樂說、今
多寶如來の塔、法華經を說くを聞きたまはんが故に、地より涌出して讚めて善哉善哉と言
ふ。是の時に大樂說菩薩、如來の神力を以ての故に、佛に白して言さく、世尊、我等願は
くは此の佛身を見たてまつらんと欲す。佛、大樂說菩薩摩訶薩に告げたまはく、是の多寶

佛深重の願あります。若し我が寶塔、法華經を聽かんが爲の故に諸佛の前に出でん時、其れ
我が身を以て四衆に示さんと欲することあらば、彼の佛の分身の諸佛十方世界に在して說
法したまふを、盡く一處に還し集めて、然して後に身乃ち出現せんのみ。大樂說、我が分
身の諸佛十方世界に在つて說法する者を、今當に集むべし。大樂說、佛に白して言さく、
世尊、我等亦願はくは世尊の分身の諸佛を見たてまつり禮拜し供養せんと欲す。爾の時に
佛白毫の一光を放ちたまふに、卽ち東方五百萬億那由佗恒河沙等の國土の諸佛を見たてま
つる。彼の諸の國土は皆玻梨を以て地とし、寶樹・寶衣以て莊嚴として、無數千萬億の菩薩
其の中に充滿せり。徧く寶幔を張つて寶網上に羅けたり。彼の國の諸佛、大妙音を以て諸
法を說きたまふ。及び無量千萬億の菩薩の、諸國に徧滿して衆の爲に法を說くを見る。南・
西・北方・四維・上・下・白毫相の光の所照の處も亦復是の如し
爾の時に十方の諸佛、各衆の菩薩に告げて言はく、善男子、我今娑婆世界の釋迦牟尼佛の
所に往き、竝に多寶如來の寶塔を供養すべし。時に娑婆世界卽ち變して淸淨なり。瑠璃を
地として寶樹莊嚴し、黃金を繩として以て八道を界ひ、諸の聚落・村營・城邑・大海・江河・山
川・林藪なく、大寶の香を燒き、曼陀羅華徧く其の地に布き、寶の網幔を以て其の上に羅け

覆ひ、諸の寶鈴を懸けたり。唯此の會の衆を留めて、諸の天人を移して他土に置く。是の
時に諸佛、各々一りの大菩薩を將ゐて以て侍者とし、娑婆世界に至つて各寶樹の下に到り
たまふ。一一の寶樹高さ五百由旬、枝葉華果、次第に莊嚴せり。諸の寶樹下に皆師子の座
あり、高さ五由旬。亦大寶を以て之を校飾せり。爾時に諸佛、各此の座に於て結跏趺坐し
たまふ。是の如く展轉して三千世界に徧滿せり。而も釋迦牟尼佛の一方所分の身に於て、
猶故未だ盡きず。時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛を容受せんと欲するが故に、八方に各更
に二百萬億那由佗の國を變じて、皆清淨ならしめたまふ。地獄・餓鬼・畜生及び阿修羅ある
ことなし。又諸の天人を移して他土に置く。所化の國亦瑠璃を以て地とし寶樹莊嚴せり。
樹の高さ五百由旬、枝葉華果、次第に嚴飾せり。樹下に皆寶の師子座あり、高さ五由旬。種種
の諸寶以て莊校とす。亦大海・江河及び目眞鄰陀山・摩訶目眞鄰陀山・鐵圍山・大鐵圍山・須彌
山等・の諸山の王なく、通じて一佛國土となつて寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔徧く
其の上に覆ひ、諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸天の寶華徧く其の地に布けり。釋迦牟
尼佛、諸佛の當に來り坐したまふべきが爲の故に、復八方に於て、各二百萬億那由佗の國を
變じて、皆清淨ならしめたまふ。地獄・餓鬼・畜生及び阿修羅あることなし。又諸の天人を

移して他土に置く。所化の國亦瑠璃を以て地とし寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝葉
華果、次第に莊嚴せり。樹下に皆寶の師子座あり、高さ五由旬。亦大寶を以て之を校飾せ
り。亦大海、江河及び目眞隣陀山・摩訶目眞隣陀山・鐵圍山・大鐵圍山・須彌山等の諸山の王
なく、通じて一佛國土となつて寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔徧く其の上に覆ひ、
諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸天の寶華徧く其の地に布けり。爾の時に東方の釋迦
牟尼佛の所分の身の百千萬億那由佗恒河沙等の國土の中の諸佛、各各に說法したまへる此
に來集せり。是の如く次第に十方の諸佛皆悉く來集して、八方に坐したまふ。爾の時に一
一方の四百萬億那由佗の國土に、諸佛如來其中に徧滿したまへり。是の時に諸佛各寶樹下
に在して師子座に坐し、皆侍者を遣はして釋迦牟尼佛を問訊したまふ。各寶華を齎ち掬に
滿てゝ、之に告げて言はく、善男子、汝耆闍崛山の釋迦牟尼佛の所に往詣して、我が辭の
如く曰せ、少病少惱、氣力安樂にましますや。及び菩薩、聲聞衆悉く安穩なりや不やと。此
の寶華を以て佛に散じ供養して、是の言をなせ、彼の某甲の佛此の寶塔を開かんと與欲す
と。諸佛使を遣はしたまふこと亦復是の如し。爾の時に釋迦牟尼佛。諸分身の諸佛悉く已
に來集して、各各に師子の座に坐し給を見そなはし、皆諸佛の同じく寶塔を開かんと與欲

したまふを聞こしめして、卽ち座より起つて虛空の中に住したまふ。一切の四衆起立合掌
し、一心に佛を觀たてまつる。是に釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔の戸を開きたまふ。大
音聲を出すこと、關鑰を却けて大城の門を開くが如し。卽時に一切の衆會、皆多寶如來の
寶塔の中に於て師子座に坐したまひ、全身散せざること禪定に入るが如くなるを見、又其
の善哉善哉釋迦牟尼佛、快く是の法華經を說きたまふ、我是の經を聽かんが爲の故に而も
此に來至せりと言ふを聞く。爾の時に四衆等、過去の無量千萬億劫に滅度したまひし佛の、
是の如き言を說きたまふを見て、未曾有なりと歎じ、天の寶華聚を以て多寶佛及び釋迦牟
尼佛の上に散ず。爾の時に多寶佛、寶塔の中に於て、半座を分ち釋迦牟尼佛に與へて、是
の言をなしたまはく、釋迦牟尼佛此の座に就きたまふべし。卽時に釋迦牟尼佛其の塔中に
入り、其の半座に坐して結跏趺坐したまふ。爾の時に大衆二如來の七寶塔中の師子座上に
在して結跏趺坐したまふを見たてまつり、各是の念をなさく、佛高遠に坐したまへり、唯
願はくは如來、神通力を以て我が等輩をして俱に虛空に處せしめたまへ。卽時に釋迦牟尼
佛、神通力を以て諸の大衆を接して皆虛空に在きたまふ。大音聲を以て普く四衆に告げた
まはく、誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を說かん。今正しく是れ時なり。如來

久しからずして當に涅槃に入るべし。佛、此の妙法華經を以て付囑して在ることわらしめ
んと欲す。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、
聖主世尊　久しく滅度したまふと雖も　寶塔の中に在して　尙ほ法の爲に來りたまへり
諸人云何ぞ　勤めて法の爲にせざらん　此の佛滅度したまひて　無央數劫なり　處處に法
を聽きたまふとは　遇ひ難きを以ての故なり　彼の佛の本願は　我滅度の後　在在所往に
常に法を聽かんが爲なり　又た我が分身　無量の諸佛　恒沙等の如く　來れる法を聽き
及び滅度の多寶如來を見たてまつらんと欲して　各妙土　及び弟子衆　天人龍神　諸の
供養の事を捨てゝ　法をして久しく住せしめんが　故に此に來至したまへり　諸佛を坐せ
しめんが爲に　神通力を以て　無量の衆を移して　國をして淸淨ならしむ　諸佛各各に
寶樹下に詣りたまふ　淸涼池の　蓮華莊嚴せるが如し　其の寶樹下の　諸の師子座に　佛
其の上に坐したまひて　光明嚴飾せること　夜の闇の中に　大なる炬火を燃せるが如し
身より妙香を出して　十方の國に徧じたまふ　衆生薰を蒙つて　喜自ら勝へず　譬へば大
風の　小樹の枝を吹くが如し　是の方便を以て　法をして久しく住せしむ　諸の大衆に告
ぐ　我が滅度の後に　誰か能く　斯の經を護持し讀誦せん　今佛前に於て　自ら誓言を說

け　其れ多寶佛　久しく滅度したまふと雖も　大誓願を以て　師子吼したまふ　多寶如來
及與我が身　集むる所の化佛　當に此の意を知るべし　諸の佛子等　誰か能く法を護ら
ん　當に大願を發して　久しく住することを得せしむべし　其れ能く　此の經法を護るこ
とあらん者は　則ち爲れ　我及び多寶を供養するなり　此の多寶佛　寶塔に處して　常に
十方に遊びたまふ　是の經の爲の故なり　亦復諸の來りたまへる化佛の　諸の世界を　莊
嚴し光飾したまふ者を供養するなり　若し此の經を說かば　則ち爲れ我　多寶如來　及び
諸の化佛を見たてまつるなり　諸の善男子　各諦かに思惟せよ　此は爲れ難事なり　宜し
く大願を發すべし　諸餘の經典　數恒沙の如し　此れ等を說くと雖も　未だ難しと爲すに
足らず　若し須彌を接つて　他方の　無數の佛土に擲げ置かんも　亦未だ難しとせず　若
し足の指を以て　大千界を動かし　遠く他國に擲げんも　亦未だ難しとせず　若し有頂に
立つて　衆の爲に　無量の餘經を演說せんも　亦未だ難しとせず　若し佛の滅度に　惡世
の中に於て　能く此の經を說かん　是れ則ち難しとす　假使人あつて　手に虛空を把つて
以て遊行すとも　亦未だ難しとせず　我が滅後に於て　若しは自らも書き持ち　若しは人
をしても書かしめん　是れ則ち難しとす　若し大地を以て　足の甲の上に於て　梵天に昇

らんも　亦未だ難しとせず　佛の滅度の後に　惡世の中に於て　暫くも此の經を讀まん
是れ則ち難しとす　假使刼燒に　乾ける艸を擔ひ負うて　中に入つて燒けざらんも　亦未
だ難しとせず　我が滅度の後に　若し此の經を持つて　一人の爲にも說かん　是れ則ち難
しとす　若し八萬　四千の法藏　十二部經を持つて　人の爲に演說して　諸の聽かん者を
して　六神通を得せしめん　能く是の如くすと雖も　亦未だ難しとせず　我が滅後に於て
此の經を聽受して　其の義趣を問はん　是れ則ち難しとす　若し人法を說いて　千萬億
無量無數　恒沙の衆生をして　阿羅漢を得　六神通を具せしめん　是の益ありと雖も　亦
未だ難しとせず　我が滅後に於て　若し能く　斯の如き經典を奉持せん　是れ則ち難しと
す　我佛道を爲て　無量の土に於て　始より今に至るまで　廣く諸經を說く　而も其の中
に於て　此の經第一なり　若し能く持つことあるは　卽ち佛身を持つなり　諸の善男子
我が滅後に於て　誰か能く　此の經を受持し讀誦せん　今佛前に於て　自ら誓言を說け
此の經は持ち難し　若し暫くも持つ者は　我卽ち歡喜す　諸佛も亦然なり　是の如きの人
は　諸佛の歎めたまふ所なり　是れ則ち勇猛なり　是れ卽ち精進なり　是れを戒を持ち
頭陀を行ずる者と名く　卽ち爲れ疾く　無上の佛道を得たり　能く來世に於て　此の經を

讀み持たんは　是れ眞の佛子　淳善の地に住するなり　佛の滅度の後に　能く其の義を解　1
せんは　是れ諸の天人　世間の眼なり　恐畏の世に於て　能く須臾も說かんは　一切の天　2
人　皆供養すべし　3

妙法蓮華經提婆達多品十二

爾の時に佛、諸の菩薩及び天・人・四衆に告げたまはく、我過去無量劫の中に於て法華經を求　1
めしに、懈倦ありることなし。多劫の中に於て常に國王と作つて、願を發して無上菩提を求　2
めしに、心退轉せず。六波羅密を滿足せんと欲するをもつて布施を勤行せしに、心に象馬・　3
七珍・國城・妻子・奴婢・僕從・頭目・髓腦・身肉・手足を悋惜することなく、軀命をも惜まざり　4
き。時に世の人民壽命無量なり。法の爲の故に國位を捨てゝ政を太子に委せ、鼓を擊つて　5
四方に宣令して法を求めき。誰か能く我が爲に大乘を說かん者なる。我當に身を終るまで　6
供給し走使すべし。時に仙人あり、來つて王に白して言さく、我大乘を有てり、妙法蓮華　7
經と名けたてまつる。若し我に違はずんば當に爲に宣說すべし。王、仙の言を聞いて歡喜　8
踊躍し、卽ち仙人に隨つて所須を供給し、果を採り、水を汲み、薪を拾ひ、食を設け、乃　9
至身を以て床座と作せしに、身心倦きことなかりき、時に奉事すること千歲を經て、法の　10
爲の故に精勤し給待して、乏しき所なからしめき。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べん　11

と欲して、偈を說いて言はく、

我過去の劫を念ふに　大法を求むるをもつての故に　世の國王と作れりと雖も　五欲の樂
を貪らざりき　鐘を推いて四方に告ぐ　誰か大法を有てる者なる　若し我が爲に解說せば
身當に奴僕と爲るべし　時に阿私仙あり　來つて大王に白さく　我微妙の法を有てり　世
間に希有なる所なり　若し能く修行せば　我當に汝が爲に說くべし　時に王仙の言を聞い
て　心に大喜悅を生じ　卽便仙人に隨つて　所須を供給し　薪及び果蓏を採つて　時に隨
つて恭敬して與へき　情に妙法を存せるが故に　身心懈倦なかりき　普く諸の衆生の爲に
大法を勤求して　亦己が身　及び五欲の樂の爲にせず　故に大國の王と爲つて　勤求して
此の法を獲て　遂に成佛を得ることを致せり　今故に汝が爲に說く

佛諸の比丘に告げたまはく、爾の時の王とは則ち我が身是れなり。時の仙人とは今の提婆
達多是れなり。提婆達多が善知識に由るが故に、我をして六波羅密・慈悲喜捨・三十二相・八
十種好・紫磨金色・十力・四無所畏・四攝法・十八不共・神通道力を具足せしめたり。等正覺を
成じて廣く衆生を度すること、皆提婆達多が善知識に因るが故なり。諸の四衆に告げたま
はく、提婆達多却つて後無量劫を過ぎて當に成佛することを得べし。號を天王如來・應供・

正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊といはん。世界を天道と名
けん、時に天王佛世に住すること二十中劫、廣く衆生の爲に妙法を說かん。恒河沙の衆生
阿羅漢果を得、無量の衆生緣覺の心を發し、恒河沙の衆生無上道の心を發し無生忍を爲、
不退轉に住せん。時に天王佛般涅槃の後、正法世に住すること二十中劫、全身の舍利に七
寶の塔を起てゝ、高さ六十由旬、縱廣四十由旬ならん。諸天人民悉く雜華・抹香・燒香・塗
香・衣服・瓔珞・幡蓋・寶蓋・伎樂、歌頌を以て、七寶の妙塔を禮拜し供養せん。無量の衆生阿
羅漢果を得、無數の衆生辟支佛を悟り、不可思議の衆生菩提心を發して不退轉に至らん。
佛諸の比丘に告げたまはく、未來世の中に若し善男子、善女人あつて、妙法華經の提婆達
多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方
の佛前に生ぜん。所生の處には常に此の經を聞かん、若し人天の中に生れば勝妙の樂を受
け、若し佛前にあらば蓮華より化生せん。時に下方の多寶世尊の所從の菩薩、名を智積と
いふ。他寶佛に白さく、當に本土に還りたまふべし。釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、
善男子、且く須臾を待て。此に菩薩あり、文殊師利と名く。與に相見るべし。妙法を論說
して本土に還るべし。爾の時に文殊師利、千葉の蓮華の大さ車輪の如くなるに坐し、俱に

來れる菩薩も亦寶蓮華に坐して、大海の娑竭羅龍宮より自然に湧出して、虛空の中に住し、
靈鷲山に詣でて蓮華より下りて佛前に至り、頭面に、二世尊の足を敬禮し、敬を修するこ
と已に畢つて、智積の所に往いて共に相慰問して、却つて一面に坐しぬ。智積菩薩、文殊
師利に問はく、仁龍宮に往いて化する所の衆生、其の數幾何ぞ。文殊師利の言はく、其の
數無量にして稱計す可からず、口の宣ぶる所に非ず、心の測る所に非ず、且く須臾を待て。
自ら當に證知すべし。所言未だ竟らざるに、無數の菩薩寶蓮華に坐して海より湧出し、靈
鷲山に詣でて虛空に住在せり。此の諸の菩薩は、皆是れ文殊師利の化度せる所なり。菩薩
の行を具して皆共に六波羅蜜を論說す。本聲聞なりし人は虛空の中に在つて聲聞の行を說
く。今皆大乘の空の義を修行す。文殊師利、智積に謂つて曰く、海に於て敎化せること其
の事此の如し。爾の時に智積菩薩、偈を以て讚めて曰く、

大智德勇健にして　無量の衆を化度せり　今此の諸の大會　及び我皆已に見つ　實相の義
を演暢し　一乘の法を開闡して　廣く諸の群生を導いて　速かに菩提を成ぜしむ

文殊師利の言はく、我海中に於て唯常に妙法華經を宣說す。智積菩薩、文殊師利に問うて
言はく、此の經は甚深微妙にして諸經の中の寶、世に希有なる所なり。頗し衆生の勤加精

進し此の經を修行して、速かに佛を得るありや不や。文殊師利の言はく、有り。娑竭羅龍
王の女年始めて八歲なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得た
り、諸佛の所說甚深の秘藏悉く能く受持し、深く禪定に入つて諸法を了達せり。刹那の頃
に於て菩提心を發して不退轉を得。辯才無礙なり。衆生を慈念すること猶ほ赤子の如し、
功德具足して、心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり、慈悲仁讓・志意和雅にして能く菩提
に至れり。智積菩薩の言はく、我釋迦如來を見たてまつれば、無量劫に於て難行苦行し功
を積み德を累ねて、菩薩の道を求むること未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀る
に、乃至芥子の如き許りも、是れ菩薩にして身命を捨てたまふ處に非ることあることなし、
衆生の爲の故なり。然して後に乃ち菩提を成ずることを得たまへり。信ぜじ、此の女の須
臾の頃に於て便ち正覺を成ずることを。言論未だ訖らざるに、時に龍王の女忽ちに前に現
じて、頭面に禮敬し、却つて一面に住して、偈を以て讚めて曰さく、

深く罪福の相に達して　徧く十方を照したまふ　微妙の淨き法身　相を具せること三十二
八十種好を以て　用つて法身を莊嚴せり　天人の戴仰する所　龍神も咸く恭敬す　一切
衆生の類　宗奉せざる者なし　又聞いて菩提を成ずること　唯佛のみ當に證知したまふべ

し　我大乘の敎を聞いて　苦の衆生を度脫せん

爾の時に舍利弗、龍女に語つて言はく、汝久しからずして無上道を得たりと謂へる。是の事信じ難し。所以は何ん、女身は垢穢にして是れ法器に非ず、云何んぞ能く無上菩提を得ん。佛道は懸曠なり。無量劫を經て勤苦して行を積み具に諸度を修し、然して後に乃ち成ず。又女人の身には猶ほ五障あり、一は梵天王となることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何ぞ女身速に成佛すること得ん。爾の時に龍女一つの寶珠あり、價直三千大千世界なり。持つて以て佛に上る。佛卽ち之を受けたまふ。龍女、智積菩薩・尊者舍利弗に謂つて言はく、我寶珠を獻る。世尊の納受是の事疾しや不や。答へて言はく、甚だ疾し。女の言はく、汝が神力を以て我が成佛を觀よ。復此れよりも速かならん。當時の衆會、皆龍女の忽然の間に坐して男子となつて、菩薩の行を具して、卽ち南方無垢世界に往いて寶蓮華に坐し等正覺を成じ、三十二相・八十種好あつて、普く十方の一切衆生の爲に妙法を演說するを見る。爾の時に娑婆世界の菩薩・聲聞・天・龍・八部・人と非人と皆遙かに彼の龍女の成佛して、普く時の會の人天の爲に法を說くを見て、心大に歡喜して悉く遙かに敬禮す。無量の衆生法を聞いて解悟し不退轉を得、無量の衆生道の記

を受くることを得たり。無垢世界六反に震動す。娑婆世界の三千の衆生不退の地に住し、三千の衆生菩提心を發して受記を得たり。智積菩薩及び舍利弗、一切の衆會默然として信受す。

妙法蓮華經勸持品第十三

爾の時に藥王菩薩摩訶薩及び大樂說菩薩摩訶薩、二萬の菩薩眷屬と俱に、皆佛前に於て是
の誓言を作さく、唯願はくは世尊、以て慮ひしたまふべからず。我等佛の滅後に於て當に
此の經典を奉持し讀誦し說きたてまつるべし。後の惡世の衆生は善根轉た少くして增上慢
多く、利供養を貪り、不善根を增し、解脫を遠離せん。敎化すべきこと難しと雖ども、我
等當に大忍力を起して、此の經を讀誦し持說し書寫し、種種に供養し身命を惜まざるべし。
爾の時に衆中の五百の阿羅漢の受記を得たる者、佛に白して言さく、世尊、我等亦自ら誓
願すらく、異の國土に於て廣く此經を說かん。復た學無學八千人の受記を得たる者あり。
座より而も起つて合掌し佛に向ひたてまつりて、是の誓言を作さく、世尊、我等亦當に佗
の國土に於て廣く此の經を說くべし。所以は何ん、是の娑婆國の中は人弊惡多く、增上慢
を懷き功德淺薄に、瞋濁諂曲にして心不實なるが故に。爾の時に佛の姨母摩訶波闍波提比
丘尼、學無學の比丘尼六千人と俱に、座より而も起つて一心に合掌し、尊顏を瞻仰して目

暫くも捨てず。時に世尊、憍曇彌に告げたまはく、何が故ぞ憂の色にして如來を視る。汝
が心に將に我汝が名を說いて阿耨多羅三藐三菩提の記を授けずと謂ふことなし耶。憍曇彌
我先に總じて一切の聲聞に皆已に授記すと說きゝ、今汝記を知らんと欲せば、將來の世に
當に六萬八千億の諸佛の法の中に於て大法師となるべし。及び六千の學無學の比丘尼も俱
に法師と爲らん。汝是の如く漸漸に菩薩の道を具して、當に作佛することを得べし。一切
衆生喜見如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號け
ん。憍曇彌、此の一切衆生喜見佛及び六千の菩薩、轉次に授記して阿耨多羅三藐三菩提を
得ん。爾の時に羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、是の念を作さく、世尊、授記の中に於て獨我
が名を說きたまはず。佛、耶輸陀羅に告げたまはく、汝來世百千萬億の諸佛の法の中に於
て、菩薩の行を修し大法師と爲り漸く佛道を具して、善國の中に於て當に作佛することを
得べし。具足千萬光相如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・
佛・世尊と號けん。佛の壽無量阿僧祇劫ならん。爾の時に摩訶波闍波提比丘尼及び耶輸陀
羅比丘尼竝に其の眷屬、皆大に歡喜し未曾有なることを得、卽ち佛前に於て偈を說いて言
さく、

世尊導師　天人を安穩ならしめたまふ　我等記を聞いて　心安く具足しぬ　1
諸の比丘尼是の偈を說き已つて、佛に白して言さく、世尊、我等亦能く佗方の國土に於て、2
廣く此の經を宣べん。3
爾の時に世尊、八十萬億那由佗の諸の菩薩摩訶薩を視そなはす。是の諸の菩薩は皆是れ阿4
惟越致にして、不退の法輪を轉じ、諸の陀羅尼を得たり。卽ち座より起つて佛前に至り一5
心に合掌して、是の念を作さく、若し世尊、我等に此の經を持說せよと告敕したまはば、6
當に佛の敎の如く廣く斯の法を宣ぶべし。復是の念を作さく、佛今默然として告敕せられ7
ず。我當に云何がすべき。時に諸の菩薩、佛意に敬順し竝に自ら本願を滿ぜんと欲して、8
便ち佛前に於て獅子吼を作して、誓言を發さく、世尊、我等如來の滅後に於て、十方世界9
に周旋往返して、能く衆生をして此の經を書寫し、受持し讀誦し、其の義を解說し、法の10
如く修行し、正憶念せしめん、皆是れ佛の威力ならん。唯願はくは世尊、佗方に在すとも11
遙かに守護せられよ。卽時に諸の菩薩俱に同じく聲を發して、偈を說いて言さく、12
唯願はくは慮ひしまたふべからず佛の滅度の後　恐怖惡世の中に於て　我等當に廣く說く13
べし　諸の無智の人　惡口罵詈等し　及び刀杖を加ふる者あらん　我等皆當に忍ぶべし14

惡世の中の比丘　邪智にして心諂曲に　未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ　我慢の心充滿せ1
ん　或は阿練若に　納衣にして空閑に在つて　自ら眞の道を行ずと謂うて　人間を輕賤す2
る者あらん　利養に貪著するが故に　白衣のために法を說いて　世に恭敬せらるゝこと3
六通の羅漢の如くならん　是の人惡心を懷き　常に世俗の事を念ひ　名を阿練若に假つて4
好んで我等が過を出さん　而も是の如き言を作さん　此の諸の比丘等は　利養を貪るを5
爲ての故に　外道の論議を說く　自ら此の經典を作つて　世間の人を誑惑す　名聲を求む6
るを爲ての故に　分別して是の經を說くと　常に大衆の中に在つて　我等を毀らんと欲す7
るが故に　國王大臣　婆羅門居士　及び餘の比丘衆に向つて　誹謗して我が惡を說いて8
是れ邪見の人　外道の論議を說くと謂はん　我等佛を敬ふが故に　悉く是の諸惡を忍ばん9
斯れに輕しめて　汝等は皆是れ佛なりと謂はれん　此の如き輕慢の言を　皆當に忍んで10
之を受くべし　濁劫惡世の中には　多く諸の恐怖あらん　惡鬼其の身に入つて　我を罵詈11
毀辱せん　我等佛を敬信して　當に忍辱の鎧を著るべし　是の經を說かんが爲め故に　此12
の諸の難事を忍ばん　我身命を愛せず　但無上道を惜む　我等來世に於て　佛の所囑を護13
持せん　我尊自ら當に知しめすべし　濁世の惡比丘は　佛の方便　隨宜所說の法を知らず14

惡口して擯斥し　數數擯出せられ　塔寺を遠離せん　此の如き等の衆惡をも　佛の告敕を
念ふが故に　皆當に是の事を忍ぶべし　諸の聚落城邑に　其れ法を求むる者あらば　我皆
其の所に到つて　佛の所囑の法を說かん　我は是れ世尊の使なり　衆に處するに畏るゝ所
なし　我當に善く法を說くべし　願はくは佛安穩に住したまへ　我世尊の前　諸の來りた
まへる十方の佛に於て　是の如き誓言を發す　佛自ら我が心を知しめせ

妙法蓮華經安樂行品第十四

爾の時に文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、是の諸の菩薩は甚だ爲れ
有り難し。佛に敬順したてまつるが故に大誓願を發す。後の惡世に於て此の法華經を護持
し讀誦し說かん。世尊、菩薩摩訶薩後の惡世に於て云何してか能く是の經を說かん。佛、
文殊師利に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩後の惡世に於て是の經を說かんと欲せば、當に
四法に安住すべし。一には菩薩の行處・親近處に安住して、能く衆生の爲に是の經を演說す
べし。文殊利師、云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。若し菩薩摩訶薩忍辱の地に住
し、柔和善順にして卒暴ならず、心亦驚かず、復亦法に於て行ずる所なくして、諸法如實
の相を觀じ、亦不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く。云何なるをか菩薩摩
訶薩の親近處と名くる。菩薩摩訶薩、國王・王子・大臣・官長に親近せざれ。諸の外道・梵志・
尼犍子等、及び世俗の文筆・讚詠の外書を造る。及び路伽耶陀・逆路伽耶陀の者に親近せざ
れ。亦諸の有ゆる兒戲の相扠相撲、及び那羅等の種種變現の戲に親近せざれ。又旃陀羅、

及び豬羊雞狗を畜ひ畋獵漁捕する諸の惡律儀に親近せざれ。是の如き人等或時に來らば、則
ち爲に法を說いて希望する所なかれ。又聲聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近せ
ざれ、亦問訊せざれ。若しは房中に於ても、若しは經行の處、若しは講堂の中に在つても、
共に住止せざれ。或時に來らば宜しきに隨つて法を說いて希求する所なかれ。文殊師利、
又菩薩摩訶薩、女人の身に於て能く欲想を生ずる相を取つて、爲に法を說くべからず。亦
見んと樂はざれ。若し佗の家に入らんには、小女・處女・寡女等と共に語らざれ。復亦五種
不男の人に近づいて以て親厚を爲さゞれ。獨り佗の家に入ざれ。若し因緣あつて獨入るこ
とを須ひん時には但一心に佛を念ぜよ。若し女人の爲に法を說かんには、齒を露はにして笑
はざれ、胷臆を現はさゞれ。乃至法の爲にも猶ほ親厚せざれ。況んや復餘の事をや。樂つて
年少の弟子・沙彌・小兒を蓄へざれ。亦與に師を同じうすることを樂はざれ。常に坐禪を好
んで閑なる處に在つて其の心を修攝せよ。文殊師利、是れを初の親近處と名く、復次に菩
薩摩訶薩、一切の法を觀ずるに空なり、如實相なり、顚倒せず、動せず、退せず、轉せず、
虛空の如くにして所有の性なし。一切の語言の道斷え、生せず、出せず、起せず、名なく
相なく、實に所有なし。無量・無邊・無礙・無障なり。但因緣を以て有り、顚倒に從つて生ず。

故に說く、常に樂つて是の如き法相を觀ぜよと。是を菩薩摩訶薩の第二の親近處と名く。
爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、
若し菩薩あつて　後の惡世に於て　無怖畏の心をもつて　此の經を說かんと欲せば　行處
及び親近處に入るべし　常に國王　及び國王子　大臣官長　凶險の戲者　及び旃陀羅
外道梵志を離れ　亦　增上慢の人　小乘に貪著する　三藏の學者に親近せざれ　破戒の比
丘　名字の羅漢　及び比丘尼の　戲笑を好む者　深く五欲に著して　現の滅度を求むる
諸の優婆夷に　皆親近することなかれ　是の如き人等　好心を以て來り　菩薩の所に到つ
て　佛道を聞かんとせば　菩薩則ち　無所畏の心を以て　悕望を懷かずして　爲に法を說
け　寡女處女　及び諸の不男に　皆親近して　以て親厚を爲すことなかれ　亦　屠兒魁膾
畋獵漁捕　利の爲に殺害するに親近することなかれ　肉を販つて自活し　女色を衒賣す
る　是の如きの人に　皆親近することなかれ　凶險の相撲　種種の嬉戲　諸の婬女等に
盡く親近することなかれ　獨屏處にして　女の爲に法を說くことなかれ　若し法を說かん
時には　戲笑することと得ることなかれ　里に入つて乞食せんには　一の比丘を將ゐよ
若し比丘なくんば　一心に佛を念ぜよ　是れ則ち名けて　行處近處とす　此の二處を以て

能く安樂に說け　又復　上中下の法　有爲無爲　實不實の法を行ぜざれ　亦　是れ男是
れ女と分別せざれ　諸法を得ず　知らず見ず　是れ則ち名けて　菩薩の行處とす　一切の
諸法は　空にして所有なし　常住あることなく　亦起滅なし　是れを智者の　所親近處と
名く　顚倒して　諸法は有なり無なり　是れ實なり非實なり　是れ生なり非生なりと分別
す　閑かなる處に在つて　其の心を修攝し　安住し　動ぜざること　須彌山の如くせよ
一切の法を觀ずるに　皆所有無し　猶ほ虛空の如し　堅固なることあることなし　不生な
り不出なり　不動なり不退なり　常住にして一相なり　是れを近處と名く　若し比丘あつ
て　我が滅後に於て　是の行處　及び親近處に入つて　斯の經を說かん時には　怯弱ある
ことなけん　菩薩時あつて　靜室に入り　正憶念を以て　義に隨つて法を觀じ　禪定より
起つて諸の國王　王子臣民　婆羅門等の爲に　開化し演暢して　斯の經典を說かば　其の
心安穩にして　怯弱あることなけん　文殊師利　是れを菩薩の　初の法に安住して　能く
後の世に於て　法華經を說くと名く
又文殊師利、如來の滅後に末法の中に於て是の經を說かんと欲せば、安樂行に住すべし。
若しは口に宣說し若しは經を讀まん時、樂つて人及び經典の過を說かざれ。亦諸餘の法師

を輕慢せざれ　佗人の好惡長短を說かざれ。聲聞の人に於て亦名を稱して其の過惡を說か
ざれ。亦名を稱して其の美きを讚歎せざれ。又亦怨嫌の心を生ぜざれ。善く是の如き安樂
の心を修するが故に、諸の聽くことあらん者其の意に逆はじ。難問する所あらば小乘の法
を以て答へざれ。但大乘を以て爲に解說して一切種智を得せしめよ。爾の時に世尊、重ね
て此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、
菩薩常に樂つて　安穩に法を說け　淸淨の地に於て　牀座を施し　油を以て身に塗り　塵
穢を澡浴し　新淨の衣を著　內外俱に淨くして　法座に安處して　問に隨つて爲に說け
若し比丘　及び比丘尼　諸の優婆塞　優婆夷　國王王子　群臣士民あらば　微妙の義を以
て　和顏にして爲に說け　若し難問することあらば　義に隨つて答へよ　因緣譬喩をもつ
て　敷演し分別せよ　是の方便を以て　皆發心せしめ　漸漸に增益して　佛道に入らしめ
よ　懶惰の意　及び懈怠の想を除き　諸の憂惱を離れて　慈心を以て法を說け　晝夜に常
に　無上道の敎を說け　諸の因緣　無量の譬喩を以て　衆生に開示して　咸く歡喜せしめ
よ　衣服臥具　飮食醫藥　而も其の中に於て　悕望する所なかれ　但一心に　說法の因緣
を念じ　佛道を成じて　衆をして亦爾ならしめんと願ふべし　是れ則ち大利　安樂の供養

なり　我が滅度の後に　若し比丘あつて　能く斯の　妙法華經を演說せば　心に嫉恚　諸
惱障礙なく　亦憂愁　及び罵詈する者なく　又怖畏し　刀杖を加へらるゝ等なく　亦擯出
せらるゝことなけん　忍に安住するが故に　智者是の如く　善く其の心を修せば　能く安
樂に住すること　我が上に說くが如くならん　其の人の功德は　千萬億劫に　算數譬喩を
もつて　說くとも盡くすこと能はじ

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て斯の經典を受持し讀誦せん
者は、嫉妬・諂誑の心を懷くことなかれ。亦佛道を學する者を輕罵し、其の長短を求むること
となかれ。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の聲聞を求むる者・辟支佛を求むる者・菩薩の
道を求むる者、之を惱まし其れをして疑悔せしめて、其の人に語つて汝等道を去ること甚
だ遠し終に一切種智を得ること能はじ。所以は何ん、汝は是れ放逸の人なり、道に於て懈
怠なるが故にと言ふこと得ることなかれ。又亦諸法を戲論して諍競する所あるべからず。
當に一切衆生に於て大悲の想を起し、諸の如來に於て慈父の想を起し、諸の菩薩に於て大
師の想を起すべし。十方の諸大菩薩に於て常に深心に恭敬・禮拜すべし。一切衆生に於て
平等に法を說け。法に順ずるを以ての故に多くもせず少くもせざれ。乃至深く法を愛せん

者にも亦爲に多く說かざれ。文殊師利、是の菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に
於て、是の第三の安樂行を成就することあらん者は、是の法を說かん時能く惱亂するもの
なけん。好き同學の共に是の經を讀誦するを得、亦大衆の而も來つて聽受し、聽き已つて能
く持ち、持ち已つて能く誦し、誦し已つて能く說き、說き已つて能く書き、若しは人をし
ても書かしめ、經卷を供養し、恭敬・尊重・讚歎するを得ん。爾の時に世尊、重ねて此の義
を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

若し是の經を說かんと欲せば　當に嫉恚慢　諂誑邪僞の心を捨てゝ　常に質直の行を修す
べし　人を輕蔑せず　亦法を戲論せざれ　佗をして疑悔せしめて　汝は佛を得じと云はざ
れ　是の佛子法を說かんには　常に柔和にして能く忍び　一切を慈悲して　懈怠の心を生
ぜざれ　十方の大菩薩　衆を愍むが故に道を行ずるに　恭敬の心を生ずべし　是れ則ち我
が大師なりと　諸佛世尊に於て　無上の父の想を生じ　憍慢の心を破して　法を說くに障
礙なからしめよ　第三の法是の如し　智者守護すべし　一心に安樂に行ぜば　無量の衆に
敬はれん

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て法華經を受持することあら

ん者は、在家・出家の人の中に於て大慈の心を生じ、菩薩に非る人の中に於て大悲の心を生じて、是の念を作すべし、是の如きの人は則ち爲れ大に如來の方便隨宜の說法を失へり。聞かず知らず覺らず、問はず信ぜず解せず。其の人是の經を問はず信ぜず解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、隨つて何れの地に在つても、神通力・智慧力を以て、之を引いて是の法の中に住することを得せしめん。文殊師利、是の菩薩摩訶薩如來の滅後に於て此の第四の法を成就することあらん者は、是の法を說かん時過失あることなけん。常に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・王子・大臣・人民・婆羅門・居士等に供養恭敬・尊重・讚歎せらるゝことを爲ん。虛空の諸天、法を聽かんが爲の故に亦常に隨侍せん。若し聚落・城邑・空閑・林中に在らんとき、人あり來つて難問せんと欲せば、諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之を衞護し、能く聽者をして皆歡喜することを得せしめん。所以は何ん、此の經は是れ一切の過去・未來・現在の諸佛の神力をもつて護りたまふ所なるが故に。文殊師利、是の法華經は無量の國の中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況んや見ることを得受持し讀誦せんをや。文殊師利、譬へば强力の轉輪聖王の、威勢を以て諸國を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王其命に順はざらん。時に轉輪王種種の兵を起して往いて討

伐するに、王、兵衆の戰ふに功ある者を見て卽ち大に歡喜し、功に隨つて賞賜し、或は田宅・聚落・城邑を與へ、或は衣服・嚴身の具を與へ、或は種種の珍寶・金・銀・瑠璃・硨磲・碼瑙・珊瑚・琥珀・象馬・車乘・奴婢・人民を與ふ。唯髻中の明珠のみ以て之を與へず。所以は何ん、獨り王の頂上に此の一の珠あり。若し以て之を與へば、王の諸の眷屬必ず大に驚き怪まんが如く、文殊師利、如來も亦復是の如し。禪定・智慧の力を以て法の國土を得て三界に王たり。而るを諸の魔王敢て順伏せず。如來の賢聖の諸將之と共に戰ふに、其の功ある者には心亦歡喜して、四衆の中に於て爲に諸經を說いて其の心をして悅ばしめ、賜ふに禪定・解脫・無漏根力・の諸法の財を以てし、又復涅槃の城を賜與して、滅度を得たりと言つて其の心を引導して皆歡喜せしむ。而も爲に法華經を說かず。文殊師利、轉輪王の諸の兵衆の大功ある者を見ては心甚だ歡喜して、此の難信の珠の久しく髻中に在つて妄りに人に與へざるを以て、今之を與へんが如く、如來も亦復是の如し。三界の中に於て大法王たり。法を以て一切衆生を敎化す。賢聖の軍の五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戰ふに大功勳有つて、三毒を滅し三界を出でゝ魔網を破するを見ては、爾の時に如來亦大に歡喜して、此の法華經の能く衆生をして一切智に至らしめ、一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ說かざる所なる

を而も今之を說く。文殊師利、此の法華經は是れ諸の如來の第一の說、諸說の中に於て最も爲れ甚深なり。末後に賜與すること、彼の强力の王の久しく護れる明珠を今乃ち之を與ふるが如し。文殊師利、此の法華經は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て最も其の上に在り。長夜に守護して妄りに宣說せざるを、始めて今日に於て乃ち汝等がために而も之を敷演す。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

常に忍辱を行じ　一切を哀愍して　乃ち能く　佛の讚めたまふ所の經を演說す　後の末世の時に　此の經を持たん者は　家と出家と　及び非菩薩とに於て　慈悲を生ずべし　斯れ等　是の經を聞かず信ぜず　則ち爲れ大に失へり　我佛道を得て　諸の方便を以て　爲に此の法を說いて　其の中に住せしめん　譬へば强力の　轉輪の王　兵の戰うて功あるに諸物の象馬車乘　嚴身の具　及び諸の田宅　聚落城邑を賞賜し　或は衣服　種種の珍寶奴婢財物を與へ　歡喜して賜與す　如し勇健にして　能く難事を爲すことあるには　王髻中の　明珠を解いて之を賜はんが如く　如來も亦爾なり　爲れ諸法の王　忍辱の大力　智慧の寶藏あり　大慈悲を以て　法の如く世を化す　一切の人の　諸の苦惱を受け　解脫を欲求して　諸の魔と戰ふを見て　是の衆生の爲に　種種の法を說き　大方便を以て　此の

諸經を說く　既に衆生其の力を得已んぬと知つては　末後に乃ち爲に　是の法華を說くと

王髻の　明珠を解いて之を與へんが如し　此の經は爲れ尊　衆經の中の上なり　我常に守護して　妄りに開示せず　今正しく是れ時なり　汝等が爲に說く　我が滅度の後に　佛道を求めん者　安穩にして　此の經を演說する事を得んと欲せば　應當に　是の如き四法に親近すべし　是の經を讀まん者は　常に憂惱なく　又病痛なく　顏色鮮白ならん　貧窮卑賤醜陋に生れと　衆生見んと樂ふこと　賢聖を慕ふが如くならん　天の諸の童子　以て給使を爲さん　刀杖も加へず　毒も害すること能はじ　若し人惡み罵らば　口則ち閉塞せん　遊行に畏れなきこと　師子王の如く　智慧の光明　日の照すが如くならん　若し夢の中に於ても　但妙なる事を見ん　諸の如來の　師子座に坐して　諸の比丘衆に圍繞せられて　說法したまふを見ん　又龍神　阿脩羅等　數恒沙の如くにして　恭敬合掌し　自ら其の身を見るに　而も爲に法を說くと見ん　又諸佛の　身相金色にして　無量の光を放つて　一切を照し　梵音聲を以て　諸法を演說し　佛四衆の爲に　無上の法を說きたまふ身を見るに中に處して　合掌して佛を讚し　法を聞き歡喜して　供養を爲し　陀羅尼を得不退智を證す　佛其の心　深く佛道に入れりと知しめして　卽ち爲に　最正覺を成ずること

とを授記して　汝善男子　當に來世に於て　無量智の　佛の大道を得て　國土嚴淨にして
　廣大なること比なく　亦四衆あり　合掌して法を聽くべしとのたまふを見ん　又自身
山林の中に在つて　善法を修習し　諸の實相を證し　深く禪定に入つて　十方の佛を見た
てまつると見ん
諸佛の身金色にして　百福の相莊嚴したまふ　法を聞いて人の爲に說く　常に是の好き夢
あらん　又夢むらく國王と作つて　宮殿眷屬　及び上妙の五欲を捨てゝ　道場に行詣し
菩提樹下にあつて　師子座に處し　道を求むること七日を過ぎて　諸佛の智を得　無上道
を成し已り　起つて法輪を轉じ　四衆の爲に法を說くこと　千萬億劫を經　無漏の妙法を
說き　無量の衆生を度して　後に當に涅槃に入ること　煙盡きて燈の滅ゆるが如し　若し
後の惡世の中に　是の第一の法を說かば　是の人大利を得んこと　上の諸の功德の如くな
らん

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾の時に佛、諸の菩薩及び一切の大衆に告げたまはく、諸の善男子、汝等當に如來の誠諦の
語を信解すべし。復大衆に告げたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。又復諸の
大衆に告げたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。是の時に菩薩大衆、彌勒を首
として、合掌して佛に白して言さく、世尊唯願はくは之を說きたまへ。我等當に佛の語を
信受したてまつるべし。是の如く三たび白し已つて復言さく、唯願はくは之を說きたまへ。
我等當に佛の語を信受したてまつるべし。爾の時に世尊、諸の菩薩の三たび請じて止まざ
ることを知しめして、之に告げて言はく、汝等諦かに聽け、如來の祕密、神通の力を。一
切世間の天・人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠から
ず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。然るに善男子、我實に成佛して
より已來無量無邊百千萬億那由佗劫なり。譬へば五百千萬億那由佗阿僧祇の三千大千世界
を、假使人あつて抹して微塵と爲して、東方五百千萬億那由佗阿僧祇の國を過ぎて乃ち一

塵を下し、是の如く東に行いて是の微塵を盡くさんが如き、諸の善男子、意に於て云何、是の諸の世界は思惟し校計して其の數を知ることを得べしや不や。彌勒菩薩等倶に佛に白して言さく、世尊、是の諸の世界は無量無邊にして、算數の知る所に非ず、亦心力の及ぶ所に非ず。一切の聲聞・辟支佛、無漏智を以ても思惟して其の限數を知ること能はじ。我等阿惟越致地に住すれども、是の事の中に於ては亦達せざる所なり。世尊、是の如き諸の世界無量無邊なり。爾の時に佛、大菩薩衆に告げたまはく、諸の善男子、今當に分明に汝等に宣語すべし。是の諸の世界の若しは微塵を著き及び著かざる者を悉く以て塵と爲して、一塵を一劫とせん。我成佛してより已來、復此れに過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫なり。是れより來我常に此の娑婆世界に在つて說法敎化す。亦餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。諸の善男子、是の中間に於て我然燈佛等と說き、又復其れ涅槃に入ると言ひき。是の如きは皆方便を以て分別せしなり。諸の善男子、若し衆生あつて我が所に來至するには、我佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、處處に自ら名字の不同・年紀の大小を說き、亦復現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又種種の方便を以て微妙の法を說いて、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。諸の善男子、

如來諸の衆生の小法を樂へる德薄垢重の者を見ては、是の人の爲に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと說く。然るに我實に成佛してより已來久遠なること斯の若し。但方便を以て衆生を敎化して、佛道に入らしめんとして是の如き說を作す。諸の善男子、如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脫せんが爲なり。或は已身を說き、或は他身を說き、或は已身を示し、或は他身を示し、或は已事を示し、或は他事を示す。諸の言說する所は皆實にして虛しからず。所以は何ん、如來は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退若しは出あることなく、亦在世及び滅度の者なし。實に非ず、虛に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず。斯の如きの事、如來明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生、種種の性・種種の欲・種種の行・種種の憶想分別あるを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因緣・譬喩・言辭を以て種種に法を說く。所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。是の如く我成佛してより已來甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫常住にして滅せず。諸の善男子、我本と菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶ほ未だ盡ず。復上の數に倍せり。然るに今實の滅度に非れども、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。如來是の方便を以て衆生を敎化す。所以は何ん、若し佛久しく世に住せば、薄德の人は

善根を植ゑず。貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想忘見の網の中に入りなん。若し如來常
に在つて滅せずと見ば、卽ち憍恣を起して厭怠を懷き、難遭の想・恭敬の心を生ずること
能はず。是の故に如來方便を以て說く、比丘當に知るべし、諸佛の出世には値遇すべきこ
と難し。所以は何ん、諸の薄德の人は無量百千萬億劫を過きて、或は佛を見るあり、或は
見ざる者あり。此の事を以ての故に我是の言をなす、諸の比丘、如來は見ること得べきこ
と難しと。斯の衆生等是の如き語を聞いては、必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、
佛を渴仰して便ち善根を種うべし。是の故に如來實に滅せずと雖も而も滅度すと言ふ。又
善男子、諸佛如來は法皆是の如し。衆生を度せんが爲なれば皆實にして虛しからず。譬へ
ば良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練し善く衆病を治す。其の人諸の子息多し、若し
は十・二十・乃至百數なり。事の緣あるを以て遠く餘國に至りぬ。諸の子後に他の毒藥を飲
む。藥發し悶亂して地に宛轉す。是の時に其の父還り來つて家に歸りぬ。諸の子毒を飲ん
で、或は本心を失へる或は失はざる者なり。遙かに其の父を見て皆大に歡喜し、拜跪して
問訊すらく、善く安穩に歸りたまへり。我等愚癡にして誤つて毒藥を服せり。願はくは救
療せられて更に壽命を賜へと。父、子等の苦惱すること是の如きなるを見て、諸の經方に

依つて好き藥艸の色・香・美味皆悉く具足せるを求めて、擣篩和合して子に與へて服せしむ。
而して是の言を作さく、此の大良藥は色・香・美味皆悉く具足せり。汝等服すべし。速かに
苦惱を除いて復衆の患なけんと。其の諸の子の中に心を失はざる者は、此の良藥の色・香俱
に好きを見て卽ち之を服するに、病悉く除こり愈えぬ。餘の心を失へる者は其の父の來れ
るを見て、亦歡喜し問訊して病を治せんことを求索むと雖も、然も其の藥を與ふるに而も
肯て服せず。所以は何ん、毒氣深く入つて本心を失へるが故に、此の好き色・香ある藥に於
て美からずと謂へり。父是の念を作さく、此の子愍むべし、毒に中られて心皆顚倒せり。
我を見て喜んで救癒を求索むと雖も、是の如き好き藥を而も肯て服せず。我れ今當に方便
を設けて此の藥を服せしむるべし。卽ち是の言を作さく、汝等當に知るべし、我今衰老し
て死の時已に至りぬ。是の好き良藥を今留めて此に在く。汝取つて服すべし、差えじと憂
ふることなかれと。是の敎を作し已つて復佗國に至り、使を遣はして還つて告ぐ、汝が父
已に死しぬと。是の時に諸の子、父背喪せりと聞いて心大に憂惱して、是の念を作さく、
若し父在しなば我等を慈愍して能く救護せられまし。今者我を捨てて遠く佗國に喪したま
ひぬ。自ら惟るに孤露にして復恃怙なし。常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の

色・香・味美きを知つて、即ち取つて之を服するに毒の病皆愈ゆ。其の父、子悉く已に差ゆ
ることを得つと聞いて、尋いて便ち來り歸つて悉く之に見えしめんが如し。諸の善男子、
意に於て云何、頗し人の能く此の良醫の虛妄の罪を說くあらんや不や。不也、世尊。佛の
言く、我も亦是の如し。成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇劫なり。衆生
の爲の故に方便力を以て當に滅度すべしと言ふ。亦能く法の如く我が虛妄の過を說く者あ
ることなけん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、
我佛を得てより來　經たる所の諸の劫數　無量百千萬　億載阿僧祇なり　常に法を說いて
無數億の衆生を敎化して　佛道に入らしむ　爾してより來無量劫なり　衆生を度せんが
爲の故に　方便して涅槃を現ず　而も實には滅度せず　常に此に住して法を說く　我常に
此に住すれども　諸の神通力を以て　顚倒の衆生をして　近しと雖も而も見ざらしむ　衆
我が滅度を見て　廣く舍利を供養し　悉く皆戀慕を懷いて　渴仰の心を生ず　衆生既に信
伏し　質直にして意柔輭に　一心に佛を見たてまつらんと欲して　自ら身命を惜まず　時
に我及び衆僧　俱に靈鷲山に出づ　我時に衆生に語る　常に此に在つて滅せず　方便力を
以ての故に　滅不滅ありと現ず　餘國に衆生の　恭敬し信樂する者あれば　我復彼の中に

於て　爲に無上の法を說く　汝等此れを聞かずして　但我滅度すと謂へり　我諸の衆生を
見れば　苦海に沒在せり　故に爲に身を現ぜずして　其れをして渴仰を生ぜしむ　其の戀
慕するに因つて　乃ち出でて爲に法を說く　神通力是の如し　阿僧祇劫に於て　常に靈鷲
山　及び餘の諸の住處にあり　衆生劫盡きて　大火に燒かるゝと見る時も　我が此の土は
安穩にして　天人常に充滿せり　園林諸の堂閣　種種の寶を以て莊嚴し　寶樹花果多くし
て　衆生の遊樂する所なり　諸天天鼓を擊つて　常に諸の伎樂を作し　曼陀羅華を雨らし
て　佛及び大衆に散ず　我が淨土は毀れざるに　而も衆は燒け盡きて　憂怖諸の苦惱　是
の如き悉く充滿せりと見る　是の諸の罪の衆生は　惡業の因緣を以て　阿僧祇劫を過れど
も　三寶の名を聞かず　諸の有ゆる功德を修し　柔和質直なる者は　則ち皆我が身　此に
あつて法を說くと見る　或時は此の衆の爲に　佛壽無量なりと說く　久しくあつて乃し佛
を見たてまつる者には　爲に佛には値ひ難しと說く　我が智力是の如し　慧光照すこと無
量に　壽命無數劫　久しく業を修して得る所なり　汝等智あらん者　此に於て疑を生ずる
こと勿れ　當に斷じて永く盡くさしむべし　佛語は實にして虛しからず　醫の善き方便を
以て　狂子を治せんが爲の故に　實には在れども而も死すといふに　能く虛妄を說くもの

なきが如く　我も亦世の父　諸の苦患を救ふ者なり　凡夫の顚倒せるを以て　實には在れ　1
ども而も滅すと言ふ　常に我を見るを以ての故に　而も憍恣の心を生じ　放逸にして五欲　2
に著し　惡道の中に墮ちなん　我常に衆生の　道を行じ道を行ぜざるを知つて　度すべき　3
所に隨つて　爲に種種の法を說く　每に自ら是の念を作す　何を以てか衆生をして　無上　4
道に入り　速に佛身を成就することを得せしめんと　5

妙法蓮華經分別功德品第十七

爾の時に大會、佛の壽命の劫數長遠なること是の如くなるを說きたまふを聞いて、無量無　1
邊阿僧祇の衆生大饒益を得つ。時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多、我是　2
の如來の壽命長遠なるを說く時、六百八十萬億那由佗恒河沙の衆生無生法忍を得。復千倍　3
の菩薩摩訶薩あつて聞持陀羅尼門を得。復一世界微塵數の菩薩摩訶薩あつて樂說無礙辯才　4
を得。一世界微塵數の菩薩摩訶薩あつて百千萬億無量の旋陀羅尼を得。復三千大千世界微　5
塵數の菩薩摩訶薩あつて能く不退の法輪を轉ず。復二千中國土微塵數の菩薩摩訶薩あつて　6
能く淸淨の法輪を轉ず。復小千國土微塵數の菩薩摩訶薩あつて、八生に當に阿耨多羅三藐　7
三菩提を得べし。復四四天下微塵數の菩薩摩訶薩あつて四生に當に阿耨多羅三藐三菩提を　8
得べし。復三四天下微塵數の菩薩摩訶薩あつて、三生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。　9
復二四天下微塵數の菩薩摩訶薩あつて二生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復一四天　10
下微塵數の菩薩摩訶薩あつて、一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復八世界微塵數　11

の衆生あつて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發しつ。佛是の諸の菩薩摩訶薩の大法利を得
ることを說きたまふ時、虛空の中より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華を雨らして以て、無量百千億
の寶樹下の師子座上の諸佛に散じ、竝に七寶塔中の師子座上の釋迦牟尼佛及び久滅度の多
寶如來に散じ、亦一切の諸の大菩薩及び四部の衆に散ず。又細抹の栴檀、沈水香等を雨ら
し、虛空の中に於て天鼓自ら鳴つて妙聲深遠なり。又千種の天衣を雨らし、諸の瓔珞・眞
珠瓔珞・摩尼珠瓔珞・如意珠瓔珞を垂れて九方に徧ぜり。衆寶の香爐に無價の香を燒いて、
自然に周く至つて大會に供養す。一一の佛の上に諸の菩薩あつて、旛蓋を執持して次第に
上つて梵天に至る。是の諸の菩薩妙なる音聲を以て、無量の頌を歌して諸佛を讚歎したて
まつる。爾の時に彌勒菩薩座より起つて、偏に右の肩を袒にし、合掌し佛に向ひたてまつり
て、偈を說いて言さく、

佛希有の法を說きたまふ　昔より未だ曾て聞かざる所なり　世尊は大力ましまして　壽命
量るべからず　無數の諸の佛子　世尊の分別して　法利を得る者を說きたまふを聞いて
歡喜身に充徧す　或は不退の地に住し　或は陀羅尼を得　或は無礙の樂說　萬億の旋總持
あり　或は大千界　微塵數の菩薩あつて　各各皆能く　淸淨の法輪を轉ず　復た中千界

微塵數の菩薩あつて　各各に皆能く淸淨の法輪を轉ず　復小千界　微塵數の菩薩あつて
餘各八生あつて　當に佛道を成ずることを得べし　或は四三二　此の如き四天下　微塵數
の菩薩あつて　數の生に隨つて成佛せん　或は一四天下　微塵數の菩薩　餘一生あること
あつて　當に一切智を得べし　是の如き等の衆生　佛壽の長遠なることを聞いて　無量無
漏　淸淨の果報を得　復八世界　微塵數の衆生あつて　佛の壽命を說きたまふを聞いて
皆無上の心を發しつ　世尊の無量　不可思議の法を說きたまふに　多く饒益する所あるこ
と　虛空の無邊なるが如し　天の曼陀羅　摩訶曼陀羅を雨らして　釋梵恒沙の如く　無數
の佛土より來れり　栴檀沈水を雨らして　繽紛として亂れ墜つること　鳥の飛んで空より
下るが如くにして　諸佛に供散し　天鼓虛空の中にして　自然に妙聲を出し　天衣千萬億
旋轉して來下し　衆寶の妙なる香爐に　無價の香を燒いて　自然に悉く周徧して　諸の
世尊に供養す　其の大菩薩衆は　七寶の旛蓋高妙にして　萬億種なるを執つて　次第に梵
天に至る　一一の諸佛の前に　寶幢に勝旛を懸けたり　亦千萬の偈を以て　諸の如來を歌
詠したてまつる　是の如き種種の事　昔より未だ曾てあらざる所なり　佛壽の無量なるこ
とを聞いて　一切皆歡喜す　佛の名十方に聞えて　廣く衆生を饒益したまふ　一切善根を

具して　以て無上の心を助く

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多、其れ衆生あつて、佛の壽命の長遠
是の如くなるを聞いて、乃至一念の信解を生ぜば、所得の功德限量あることなけん。若し
善男子・善女人あつて、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由佗劫に於て五波羅蜜
を行ぜん。檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘黎耶波羅蜜・禪波羅蜜なり、般若波羅蜜を
ば除く。是の功德を以て前の功德に比ぶるに、百分・千分・百千萬億分にして其の一にも及ば
ず。乃至算數・譬喩も知る能はざる所なり。若し善男子、是の如き功德あつて、阿耨多羅三
藐三菩提に於て退すといはゞ、是の處あることなけん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣
べんと欲して、偈を說いて言はく、

若し人佛慧を求め　八十萬億　那由佗の劫數に於て　五波羅蜜を行ぜん　是の諸の劫の中
に於て　佛　及び緣覺弟子　竝に諸の菩薩衆に布施し供養せん　珍異の飲食　上服と臥具
と　栴檀をもつて精舍を立て　園林を以て莊嚴せる　是の如き等の布施　種種に皆微妙な
る　此の諸の劫數を盡して　以て佛道に回向せん　若し復禁戒を持つて　淸淨にして缺漏
なく　無上道の　諸佛の歎めたまふ所なるを求めん　若し復忍辱を行じて　調柔の地に住

し　設ひ衆の惡來り加ふとも　其の心傾動せざらん　諸の有ゆる得法の者の　增上慢を懷
ける　斯れに輕しめ惱まされん　是の如きにも亦能く忍ばん　若し復勤め精進し　志念常
に堅固にして　無量億劫に於て　一心に懈怠せざらん　又無數劫に於て　空閑の處に住し
て　若しは坐し若しは經行し　睡を除いて常に心を攝めん　是の因緣を以ての故に　能く
諸の禪定を生じ八十萬億劫に　安住して心亂れず　此の一心の福を持つて　無上道を願求
し　我一切智を得て　諸の禪定の際を盡くさんと　是の人百千　萬億の劫數の中に於て
此の諸の功德を行ずること　上の所說の如くならん　善男女等あつて　我が壽命を說くを
聞いて　乃至一念も信ぜば　其の福彼れに過ぎたらん　若し人悉く　一切の諸の疑悔ある
ことなくして　深心に須臾も信ぜん　其の福此の如くなることを爲　其れ諸の菩薩の　無
量劫に道を行ずるあつて　我が壽命を說くを聞いて　是れ則ち能く信受せん　是の如き諸
人等　此の經典を頂受して　我未來に於て　長壽にして衆生を度せんこと　今日の世尊の
諸釋の中の王として　道場にして師子吼し　法を說きたまふに畏るゝ所なきが如く　我等
も未來世に　一切に尊敬せられて　道場に坐せん時　壽を說くこと亦是の如くならんと願
せん　若し深心あらん者　淸淨にして質直に　多聞にして能く總持し　義に隨つて佛語を

解せん　是の如き諸人等　此に於て疑ゐることなけん

又阿逸多、若し佛の壽命長遠なるを聞いて、其の言趣を解するあらん。是の人の所得の功德限量ゐることなくして、能く如來の無上の慧を起さん。何に況んや、廣く是の經を聞き若しは人をしても聞かしめ、若しは自らも持ち若しは人をしても持たしめ、若しは自らも書き若しは人をしても書かしめ、若しは華・香・瓔珞・幢幡・繒蓋・香油・蘇燈を以て經卷に供養せんをや。是の人の功德無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。阿逸多、若し善男子・善女人、我が壽命長遠なるを說くを聞いて深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍崛山に在つて、大菩薩・諸の聲聞衆の圍繞せると共に說法するを見、又此の娑婆世界其の地瑠璃にして坦然平正に、閻浮檀金以て八道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀皆悉く寶をもつて成じて。其菩薩衆悉く其の中に處せるを見ん。若し能く是の如く觀ずる事あらん者は、當に知るべし、是を深信解の相となづく。又復如來の滅後に、若し是の經を聞いて毀訾せずして隨喜の心を起さん。當に知るべし、已に深信解の相となづく。何に況はんや、之を讀誦し受持せん者をや。斯の人は則ち爲れ如來を頂戴したてまつるなり。阿逸多、是の善男子・善女人は我が爲に復塔寺を起て及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養する事を須ひず。所以は何

ん、是の善男子・善女人の是の經典を受持し讀誦せん者は　爲れすでに塔を起て僧坊を造立し衆僧を供養するなり。則ち爲れ佛舍利を以て七寶の塔を起て、高廣漸小にして梵天に至り、諸の旛蓋及び衆の寶鈴を懸け、華・香・瓔珞・抹香・塗香・燒香・衆鼓・伎樂・簫笛・箜篌・種種の舞戲あつて、妙なる音聲を以て歌唄讚頌するなり。則ち爲れ已に無量千萬億劫に於て是の供養を作し已るなり。阿逸多、若し我が滅後に、是の經典を聞いて能く受持し、若しは自ら書き若しは人をしても書かしむることあらんは、則ち爲れ僧坊を起立し、赤栴檀を以て諸の殿堂を作ること三十有二、高さ八多羅樹、高廣嚴好にして、百千の比丘其の中に於て止み、園林・浴池・經行・禪窟・衣服・飲食・牀蓐・湯藥・一切の樂具其の中に充滿せん。是の如き僧坊・堂閣若干百千萬億にして其の數無量なる、此れを以て現前に我及び比丘僧に供養するなり。是の故に我說く、如來の滅後に、若し受持し讀誦し、他人の爲に說き、若しは自らも書き若しは人をしても書かしめ、經卷を供養することあらんは、復塔寺を起て及び僧坊を造り衆僧を供養することを須ゐず。況はんや復人ありて能く是の經を持ち、兼ねて布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧を行ぜんをや。其の德最勝にして無量無邊ならん。譬へば虛空の東・西・南・北・四維・上・下無量無邊なるが如く、是の人の功德も亦復是の如し。

無量無邊にして疾く一切種智に至らん。若し人是の經を讀誦し、受持し他人の爲に說き、
若は自らも書き若は人をしても書かしめ復能く塔を起て及び僧坊を造り、聲聞の衆僧を供
養し讃歎し、亦百千萬億の讃歎の法を以て菩薩の功德を讃歎し、又他人の爲に種種の因緣を
以て義に隨つて此の法華經を解說し、復能く淸淨に戒を持ち、柔和の者と共に同止し、忍
辱にして瞋なく志念堅固にして、常に坐禪を貴び諸の深定を得、精進勇猛にして諸の善法
を攝し、利根智慧にして善く問題を答へん。阿逸多、若し我が滅後に、諸の善男子・善女
人、是の經典を受持し讀誦せん者復是の如き諸の善功德あらん。當に知るべし　是の人は
已に道場に趣き、阿耨多羅三藐三菩提に近づいて道樹の下に坐せるなり。阿逸多、是の善
男子・善女人の若しは坐し若しは立し若しは經行せん處、此の中には便ち塔を起つべし。
一切の天人皆供養すること、佛の塔の如くすべし。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べん
と欲して、偈を說いて言はく、

若し我が滅度の後に　能く此の經を奉持せん　斯の人の福無量なること　上の所說の如し
是れ則ち是れ　一切の諸の供養を具足し　舍利を以て塔を起て　七寶をもつて莊嚴し
表剎甚だ高廣に　漸小にして梵天に至り　寶鈴千萬億にして　風の動かすに妙音を出し

又無量劫に於て　此の塔に　華香諸の瓔珞　天衣衆の伎樂を供養し　香油蘇燈を然して
周市して常に照明するなり　惡世末法の時　能く是の經を持たん者は　則ち爲れ已に上の
如く　諸の供養を具足するなり　若し能く此の經を持たんは　則ち佛の現在に　牛頭栴檀
を以て　僧坊を起て、供養し　堂三十二あつて　高さ八多羅樹　上饌妙なる衣服　牀臥具
足し　百千衆の住處　園林諸の浴池　經行及び禪窟　種種に皆嚴好にするが如し　若し信
解の心あつて　受持し讀誦し書き　若しは復人をしても書かしめ　及び經卷を供養し　華
香抹香を散じ　須曼瞻蔔　阿提目多伽の　薰油を以て常に之を然さん　是の如く供養せん
者は　無量の功德を得ん　虛空の無邊なるが如く　其の福も亦是の如し　況んや復此の經
を持つて　兼ねて布施持戒し　忍辱にして禪定を樂ひ　瞋らず惡口せざらんをや　塔廟を
恭敬し　諸の比丘に謙下して　自高の心を遠離し　常に智慧を思惟し　問難することあら
んに瞋らず　隨順して爲に解說せん　若し能く是の行を行ぜば　功德量るべからず　若し
此の法師の　是の如き德を成就せるを見ては　天華を以て散じ　天衣を其の身に覆ひ　頭
面に足を接して禮し　心を生じて佛の想の如くすべし　又是の念を作すべし　久しからず
して道場に詣して　無漏無爲を得　廣く諸の天人を利せんと　其の所住止の處　經行し若

しは坐臥し　乃至一偈をも說かん　是の中には塔を起てて　莊嚴し妙好ならしめて　種種
に以て供養すべし　佛子此の地に住すれば　則ち是れ佛受用したまふ　常に其の中に在し
て　經行し及び坐臥したまはん

1　2　3

江畔漫錄（其二）

左の一篇は、上の講演中お話した、大通智勝佛の十劫坐道場なるものが、禪家の公案に迄なつて居るので、之が委曲を打魚翁に質した夫に對する翁の返書である、參考にもと思ひ掲載する、文字の端にまで禪味を帶び、讀下さるゝに肩は凝らない。實は二卷の續の慧遠傳をも載せる筈であるが、講演の方が餘りに長くなつたので、これは次ぎの四卷に廻すことゝした。（晴川）

大通智勝

此則は今日普通に取扱はれ居る禪書にては無門關に出て居りまして、卽ち無門關の第九則であります、先づ禪宗式に訓讀して、見ませう。

興陽の讓和尙、因みに僧問ふ、大通智勝佛、十劫座道場、佛法不現前、不得成佛道の時いかん、讓曰く其問甚だ諦當なり、僧云く、既に是れ座道場、其麼として不得成佛道なる、讓曰く、伊が不成佛なるが爲なり。

興陽の讓和尚

只今手元に無門關龜頭本の持合せがないので、私の手控を種に申上ますから、讓和尚の何人であつたか、シカト記臆いたしませぬが、讓といへば、六祖門下の二大宿たる南嶽と青原との中の南嶽懷讓(エウヒヤウ)禪師のことでありませう、禪宗にて南嶽といへば、大(タイ)したものでありまして、其門下に馬祖を生じ、江西派の禪は之より起つたのであります。「因みに僧問ふ」とは、或時一人の修行僧が來て質問をしたといふことで有まして、深き意味は有ませぬ、禪錄慣用の語であります。

出典

斯の公案の出典は、法華經卷第三の化城喩品第七でありますが、禪宗の取扱ひは、經相家(キヤウサウカ)とは趣を異にするのであります、經相家は經文に對し科分けや判釋(ハンシヤク)や、色々面倒な手數をかけ、近來は文章字面の穿鑿にまで及び、漢譯よりはサンスクリット、サンスクリットよりはハリー語を信じ、意味の不明瞭なる處は疑を缺き、蟲喰いや

落丁ある經卷に、新らしきものよりも、より多く隨喜の涙を灑ぐといふ傾向をも生じ、惡るく言へば、宗教を骨董扱ひにして居りますが、是は經を昔の事實又は教訓として珍重せんとする爲でありませう、然に禪宗にては、經文などは最初よりアテにせず、アテにせざる心を以て經文を研究する以上、皮相の字面や用語には、テンで重きを置かぬのであります、是は研究の目的が異る故でありまして、禪宗にては、如何なる名言秀句たりとも、自己と血液浹洽し、呼吸相通ぜざる限り、畢竟一の夢幻伴子(ムゲンバンス)に過ぎない、即ち臨濟大師の申されました「三乘十二分教は、皆是れ不淨を拭ふ故紙なり、佛は是れ幻化(ゲンゲ)身なり、祖は是れ老比丘(ヒク)なり」とは此意味を言はれたのであります、此故に、同じく法華經を取扱ふに致しましても、天台宗や、日蓮宗にドンナ解釋が有るナド、勿論問ふの要はないので、禪宗から申しますと、他家の珍膳を眺めたのでは、自分の飢(ヒモ)じさは癒(ナホ)らぬのであります。

坐道場

禪宗に於て斯公案を取扱ふのに、先づ知らねばならぬは、座道場といふ意味であ

りますが、是れを簡單に座禪のことゝ見ましても、座禪には形の上の座禪と、形を離れたる座禪といふことが有るのであります、卽ち高座を設けるとか、本尊を安置するとか、色々に莊嚴立てまして之を道場と名つけ、眼を瞑つて、脊梁骨を眞直ぐにし、足を組み、手を拱ぬき、何時までも座はつて動かぬのが、形の上の座禪でありまして、是を一には槁楊木の座禪、又は涅槃堂の座禪とも申します、次に維摩經の中に「直心是れ道場」といふ語のありまする如く、道場とは言つても、座敷の上や、堂の中を指すのではなく、直心ソノマゝが人々固有の大道場であると見做しまして、動容周旋の間に、沈着いた工夫をして行くのが、形を離れた座禪でありまして、卽ち「祖師禪」と禪宗社會に稱し來つた所のものは、是であります。

佛法不現前

扨何種の座禪にせよ、苟も座禪をする以上、其れは成佛を目的とするのでありますが、大通智勝佛が十劫の長い時間を費しても、佛法現前せず、佛道を成することが出來なんだといふ事を法華經に書てあるのが、是れが此則の一疑問なので有ます、ソコで茲に一の挿話を申して見まするなれば、昔し馬祖大師が、衡嶽山に入つて座禪をして居るのを、其師の南嶽禪師(多分公案の主人公と同人)が見られまして、「お前は何をして居るか」と尋られました、「座禪をして成佛を求めて居ります」とお答をしますと、南嶽師は何事も言はずに、其處に落て在りました瓦を拾はれて、其れを石の上にてゴシ〳〵磨り始められました、馬祖が其れを見まして、「禪師には何をなさるゝ乎」とお尋ねをいたしますと、「此瓦を磨いて鏡にするのぢや」馬祖が「瓦は鏡には成りますまい」と反問をいたしました時、禪師は「其れよ、お前のやうに形の上の座禪をした處で、百年千年經つても、成佛することは出來る筈がない」と言はれたと云ふ事が有ます、又た南嶽師の別の語に「牛車に駕するが如し、牛往かずんば牛を打せん歟車を打せん歟」と云ふ語もあります、形の上ばかりで座禪をした處で、何の靈驗もあらう筈がないと云ふことは右の挿話の如く、禪宗でやかましく言つて居るのでありますが、然らば本則の大通智勝佛の座禪も、矢張り左樣な形の上の座禪でありたる爲に、佛法が現はれなんだと云ふので有ませう乎、或は一歩進んだ、形を離れた意味からの座禪で有つたとしたならば、必ず佛法が現前する筈であつたので有ませう

乎、扨其れはドンナもので有ませうか、コヽは辯をつけることを、しばらく遠慮いたして置きませう。

因地一聲

本來禪宗式にいへば、佛法現前せず、佛道を成ずるを得ず」といふことが、取も直さず眞の佛法なのであります、金剛經に謂ゆる、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得、短かく言へば三世不可得の絶對界が眞の佛法なのであります、極めて俗な語を使用していへば、眞理の極致は不可思議である、絶對である、無碍光如來である、無量壽佛である、ソコを豁然として貫通いたしますることを禪宗に於ては、因地一聲の境界と申すのであります、鳥渡此處で、再び他の挿話を申して見ませう、須菩提尊者が、巖中に安座して居りますと、諸天が花を雨ふらして讃歎いたしましたので、尊者は此時、「空中に花を雨ふらすは復是れ何人ぞ」と聲をかけました、處が天曰く「我は是れ天帝釋なり、」尊者曰く「汝何をか讃歎する」天曰く、「我れ尊者の善く般若波羅密多を說くことを重んずるなり、」尊者曰く、「我れ般若に於て未だ嘗て一字を說かず汝いかでか讃歎するや」天曰く「尊者無說、我乃ち無聞、無說無聞の絶對界が、是れ般若なり」と云つて、又復た地の動るぐまで花を雨ふらしたと云ふことが、碧岩集に書いてありまして、これを雪豆が「草茸々、烟冪々、空生巖畔花狼藉」といふ奇麗な句にて示して居ります、空生とは須菩提の翻譯語であります、然かし無說無聞だとか、不可得だとかいへば或は誤つて空觀に落ち易いので有まして、空觀に落ちたら最後、白日晴天眼を開いて瞌睡することになります、其れ故其邊の處は雪豆も如才はありませぬ、「彈指悲むに堪へたり舜若多、動着すること莫かれ、動着せば三十棒」と言つて居ります、舜若多といふは、虛空神と譯すべき梵語の寫音であります。

臨濟大師の教

ソコで是は類則であるか、同則であるかは判斷に任かせますが、大通智勝の事は臨濟錄にも出て居りますから、左に其れを訓讀して御參考に致しませう、「臨濟錄七十七丁」

問ふ大通智勝佛十刼座道場、佛法不現前、不得成佛道と、未審此意如何、乞ふ師指示

せよ、師云く、大通とは是れ自己處々に於て其萬法の無性無相に達するを名つけて大通となす、智勝とは、一切處に於て疑はず、一法をも得ざるを名けて智勝と爲す、佛とは心清淨の法界に透徹し得たるを名けて佛と爲す、十刼座道場とは十波羅密(檀、戒、忍、進、禪、惠、方、願、力、智)是れなり、佛法不現前とは、佛本と不生、法本と不滅、いかんぞ更に現前すること有らむ、不得成佛道とは、佛應さに更に作佛すべからざるなり、古人云く佛は世間に常在して、世間の法に染まずと、道流よ、偏作佛を得んと欲せば、萬物に隨ふ莫かれ、心生ずれば種々の法生じ、心滅すれば、種々の法滅す、一心生ぜずんば、萬法咎なし、世と、出世と、無佛無法と、(亦た)現前もせず、(亦た)背て失ひもせず、設ひ有る者も、皆是れ名言章句なり、小兒を接引する施設の藥病なり、表顯の名句なり、且つ名句自ら名句たるにあらず、是れ偏が目前昭々靈々として鑑覺し、聞知し、照燭する底、一切の名句を安んずるなり、大德よ、五無間業を造つて方さに解脫することを得む(以下略)

其問甚諦當なり

臨濟錄の解釋はサシ置まして本則に返りて御話を致しますれば、「其問甚だ諦當なり」の一句が此公案の大眼目であります、僧が「大通云々不得成佛道の時如何」と問へるに對して、讓和尚は「其處ぢや、其問が當つて居る、ソコの處ぢや」と言はれた。然るに此僧には此答の意味が呑み込めなかつた「十刼も座禪工夫を凝らしたものが、佛道を成ずることが出來なかつたと云ふのは、其れはまた何うしたことで有りますか」と繰返した、其時に讓和尚は「伊が不成佛なるが爲なり」と言はれました俗語に言ひ換えて見ますと、「不成佛だから、不成佛だつたのぢや、分らぬ奴ぢやナ貴公は……」と答へられたので有ます、此以上の解釋はコヽでは遠慮して置きますが、嗄アドウしたと云ふのでありませう？

老胡の會を許さず

本則に無問和尚の拈弄、卽ち評語があります。ソレを讀みませう、

無問曰く、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず、凡夫若し知らば卽ち是れ聖人、聖人若し會せば卽ち凡夫たらむ。

只許老胡知不許老胡會とある句は、古來名言として知られて居ます、老胡とは達磨は胡から來た老先生で有ましたから、イサヽか侮辱的に達磨のことを言ふのでありますが、コヽでは達磨の宗旨を奉ずる「知つたか振り」の禪僧を指したので、此二字は別段な意味はありませぬ、タヾ「知る」といふ事と「會する」といふ事は別物だといふ意味を強めたのであります、「合點する」といふことは出來ぬ、「分つた」といふことは覺束ない、分つたなら、行住座臥、何の場合でも、無障無碍に實行して行けねばならぬが、其れはナカ〳〵尋常の修行では出來ぬ、人間の一代仕事である、十劫座道場、佛法不現前、不得成佛道、ソコぢや、ソコぢや、「悟り」といふとも、キツチリ、アテ箍まつた處は、むづかしい、「凡夫が悟つて聖人になつた氣持で居ると、ソノ聖人が、モ一つ悟つて凡夫になり下がる、絶對界にはナカ〳〵這入りにくいものだ」と云ふのが「凡夫若知卽是聖人、聖人若會卽凡夫」の意味で有ります、此れは私の解釋でありますが、此の拈弄に對して、有名なる原の白隱和尙は、凡夫以下の句は寧ろ無い方がよいと言はれました、今の平林にござる峯尾大休師なども、白隱の遺敎を謹んで遵奉して居られます、又た故人になられた東慶の釋宗演師は、「これが有つたからと云つて、大なる差支はない、凡夫が若し分れば、卽ち佛である、佛が分つたら、凡夫に下がつて濟度することも出來やう」と云ふ意味に取つて居られました、是は湯島の麟祥院といふ處にて、私が直接宗演師より聞いた處でありますが、宗演師の斯く言はれたのは、多分成佛を解して「照用同時、卷舒齊唱、理事不二、權實並行」の境界と見做し、聖人若會卽凡夫の句を以て「一着を放過して第二義門を建立する」の境界と見られたものでありませう、……兎に角此拈弄の妙味は、前の二句に在ると云ふのが、只今では禪宗社會の定說であります。

身心了々

最後に無門和尙の偈頌が有ます、之を讀みませう、

頌に曰く身を了せんよりは何ぞ心を了するの休きに似かんや、心を了し得ば身愁へず、若し也た身心俱に了々たらば、神仙何ぞ必しも更に侯に封ぜむ。

身と心とは、禪宗にては二つのものに區別せぬのが本義でありますが、此頌では假りに之を區別して、形式に因はれた座禪をするよりも心の本體を明めるがよい

と云ふことを「身何似了」心休」と云つて居ります、心の本體といふは禪宗の說におきましては、心には、本體と影法師があるので有まして、何の彼のと云ふ外物の刺激を受けて、ムラ〳〵と起る感情は、ツマリ心の影法師なのでありますが、其本體が了かつたならば苦みはない、了得心分身不愁でありますと、コヽまでは身と心とを二つに分けて言つたのであります。其れから、若也身心俱了々、神仙何必更封侯とありますが、其意味をわかり易く申せば、ホントウの禪は身心別物でない、極樂も、地獄も、佛も、凡夫も、了と不了との上から起る色模樣でありますから、一旦了々たらば二物でない、是を知つたならば、不老不死の神仙であるから、別に公侯伯子男などゝ云ふ餘り道具は入り用がない、不得成佛道でよい、不得成佛道が卽ち成佛である、英雄回首卽神仙であると、箇樣に申して居るので有ます。

以上の解は、大略禪宗の取扱ひにて、經相家とは大に立ち場を異にする故、御參考にはなりがたきかも知れず、御迷ひなく御講義を進められん事を希望るすものに候、

大正十二年一月七日印刷
大正十二年一月十日發行

正價金貳圓

著作者　田中晴川
東京市赤坂區青山北六丁目四十二番地
發行者　河口禎一郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者　倉谷鎭夫
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社
發行所　神奈川縣橘樹郡大師河原村　江畔書屋
東京市神田區猿樹町一ノ二　光融館
大取次

不許複製

12. 2. 26

324
669

終